法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-16

三木清のドイツ・フランス留学記

宮永, 孝 / MIYANAGA, Takashi

(出版者 / Publisher)
法政大学社会学部学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
社会志林 / Hosei journal of sociology and social sciences
(巻 / Volume)
70
(号 / Number)
2
(開始ページ / Start Page)
1
(終了ページ / End Page)
97
(発行年 / Year)
2023-09
(URL)
https://doi.org/10.15002/00030535

三木　清のドイツ・フランス留学記

宮永　孝

はじめに
一　ヨーロッパへの旅立ち
二　ハイデルベルク
三　マールブルク
四　パリ
五　三木　清の「パスカルと生の存在論的解釈」
六　同論文にみる三木　清の文体
七　三木　清の『パンセ』読解
むすび
英文レジュメ（Abstract in English）

はじめに

三木　清（一八九七～一九四五、大正・昭和期の哲学者。元法大教授）が、豊多摩刑務所で獄死してから、ことしで八〇年ほどになる。第一次世界大戦後のドイツは、荒れくるう超インフレーションの渦中にあり、国民は貧苦のどん底であえいでいた。が、日本留学生は外貨のおかげでインフレ極楽を享受できた。文部省の在外研究員でない、一哲学徒にすぎなかった三木は、はからずも岩波書店の派遣留学生として、三年半ちかくドイツ・フランスにおいて学究生活をおくることができた。

本稿は、岩波書店の〝番頭学者〟とも〝ミキセイ〟とも揶揄された、三木　清の独仏における留学生活について記したものである。三木はベルリンなどにいて淫蕩にふけっている国費留学生とことなり、在外期間中、まじめに勉強したようだ。本稿をあえて二分すると、前篇は三木がドイツにおいて師事した哲学者とかれらから学んだもの、後篇はかれがフランス（パリ）においてみずから学んだパスカルの『パンセ』（断章）と、

その研究成果としての第一論文「パスカルと生の存在的解釈」について講究したものである。

筆者は三木がのちに「人間の分析」と改題したこの小論を研究材料として分析し、その構造やそこにみる文体的特徴、三木の『パンセ』（断章）読解が正しいものかどうかについて検討した。

三木の終えんの地となった豊多摩刑務所の正門。

ハイデルベルクにおける
三木　清

一　ヨーロッパへの旅立ち

大正九年（一九二〇）九月、京大を卒業した三木（二十三歳）は、北白川久保町に下宿を移し、ひきつづき大学院に籍をおき歴史哲学（歴史過程や歴史認識をあつかう哲学の一部門）の研究をつづける一方で、大谷や竜谷大学、三高の講師となり、哲学や語学をおしえた。二年後の大正十一年（一九二二、二十五歳）五月――恩師・波多野精一の推挙により、岩波書店の出資をうけ、ドイツ留学の途にのぼった。かれはなぜ一書店に資金を出してもらって留学できたのか、その理由は明らかでないが、店主の岩波茂雄は、文化の根底として哲学を重視し（安部能成（よししげ）『岩波茂雄伝』）、「哲学叢書」の売れゆきがよかったことから、前途有望な若者を海外へやり、将来の著作活動によって、新しい読者層を開拓するつもりであったようだ（小林　勇「私の履歴書」）。

波多野は三木が学才に富むじんじょうでない学生と観、こういう学生がいる、といった話を岩波にしていたのであろう。留学費をだす岩波は当時四十一歳、三木とは十五、六歳もとしのひらきがあった。かれは三木にたいしてこまごまとした注文をつけなかったことであろう。おおらかな気持で三木を海外に送りだしたと思われる。しかし、商売上必要な洋書の購入方を三木に依頼している。

三木の出発直前に岩波がかれに送った手紙が残っている。

宛て先　　兵庫県揖保郡揖西村小神

（封書のおもて）　三木　清　様

急ギ

東京神田南神保町

岩波茂雄

御機嫌よく御遊学の途に上られる事を希望いたします。

船暈の薬が手に入りましたから御送りいたします。御家の皆様に宜敷御願致します。

当店への紹介状封入して置きました。店は伯林大学の裏手と云うことです。

尚カッシラー版のカント全集五組位送る様本屋に命じて下さい。御願します。

五月十一日

三木様

岩波茂雄

注・ルビは引用者がつけたもの。『三木　清の生涯と思想』財団法人霞城館、平成10・3より。

この手紙は、渡欧まえに兵庫の実家に帰っていた三木に宛てたものである。

その後、三木はヨーロッパへむかう船にのるのである。が、かれは大正十一年（一九二二）五月の何日に、――どんな船に乗船したかもわかっていないし、本人も何も語っていない。「年譜」（『三木　清全集　第二十巻』岩波書店、昭和61・3）も、この点になると何も答えてくれない。ただ「年譜」（桝田啓三郎記）にあるのは、「五月　学才を認められ、波多野精一の推輓によって　岩波茂雄の出資を受けて、ドイツ留学に旅立った」といった記述のみである。

当時、いまとちがって外国へいく旅客機はないし、外国へ行くときは船を用いるしかなく、それは〝洋行〟といわれるほどの大事業であった。ふつう渡航者はどんなに筆ぶしょうであっても、手帳にメモていどのものを記すが、三木は航海日記やメモを残さず、またそんなことに関心はなかったようだ。

当時、神戸からマルセーユまで、船で四十数日かかる長旅であった。三木はこの間の航海についてほとんどふれていないが、かれを乗せた船（船名不詳）は、六月二十一日スエズに着いたようだ。スエズは、紅海と地中海とをむすぶ〝スエズ運河〟（一六二キロ）の起点になる港町である。このとき三木は新潟県高田市長門町に住む倉石武四郎という人に絵はがきを出している。

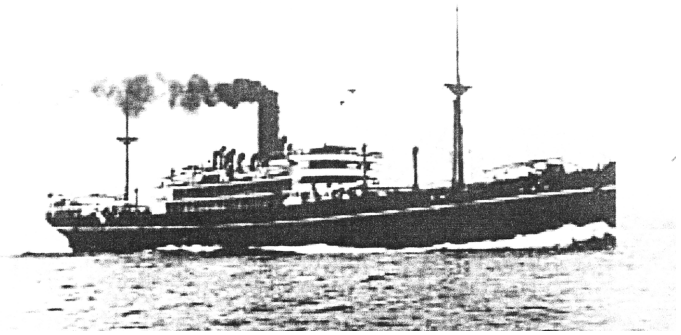
印度洋で三日ばかり船酔に苦しめられて　今日スエズに着きました。これから運河をゆくのです。明日ポートサイドでエヂプト模様の更紗（もめん地または絹地に、人物・花鳥・幾何的模様をいろいろな色でプリントした布――引用者）の買へるのを楽しみにしてゐます。

六月二十一日　　清

注・ルビおよび（　）内は引用者による。

この文章は、『三木　清全集　第十九巻』岩波書店、昭和43・5に収録されている。

翌二十二日、船はポートサイド（カイロの北東一八〇キロ）に着き、その後フランスへむかった。三木が目的地のマルセーユに上陸したのは、六月二十二、三日ごろと推定される。かれが神戸から乗った船（貨客船）は、おそらくロンドンへむかう、



三木が渡欧のとき乗った日本郵船の箱根丸

日本郵船の箱根丸（一〇、四二〇トン）

であろう。同船は五月八日午前十一時に神戸を出帆している（『神戸新聞』大正11・5・5付を参照）。

この箱根丸は、横浜――ロンドン線の貨客船（貨物船であり、旅客をのせる設備もある）であり、おもな寄港地はつぎのようなものであった。

横浜――名古屋――大阪――神戸――門司――上海（中国）――香港――華南（中国南東部）――シンガポール――コロンボ（セイロン島南西部）――アデン（紅海の入口）――スエズ（エジプト北東部）――ポートサイド（エジプト北東部の港町）――ナポリ（イタリア）――マルセーユ（フランス）――ジブラルタル（イギリスの直轄植民地）――ロンドン。

注・「第二款（かん）　欧州航路に占むる当社の地歩」『日本郵船株式会社五十年史』所収、日本郵船株式会社、昭和10・12、四一九頁）。

ちなみに阿部次郎が欧州留学に出発したのは、大正十一年五月十一日のことであり、――門司から箱根丸に乗船している。その後、同船は上海（5・12）――香港（5・16）――シンガポール（5・23）――コロンボ（5・31）――インド洋より紅海に入る（6・12）――ナポリ沖を通過し（6・17）、マルセーユに六月二十日に到着している。

その後、阿部はパリ、スイス、ベルリンに滞在したのち、ドイツへむかい、八月十日ハイデルベルクのシュヴァル方に下宿した。三木がこの町にやって来て約一ヵ月半あとのことである。

三木は船中において、「四、五人の仲間」と知りあい、その中にブルーノ・タウト（一八八〇～一九三八、ドイツの建築家）の弟子となった若い建築家・上野伊三郎（一八九二～一九七二、早大理工学部建築科卒）がいたといっている（「読書遍歴」）。上野は京都のひと。御所出入りの宮大工の子孫であり、かねてあこがれていた留学を実現すべくドイツへむかうところであった。かれはドイツ入国後、ベルリン工科大学建築科の聴講生となり構造学を専攻し、そこを修了するとウィーン大学の物理学科に転じ、振動学をおさめ、のちヨーゼフ・ホフマンの建築事務所につとめた（『上野伊三郎＋リチコレクション』京都近代美術館、二〇〇九年）。

上野伊三郎

三木が船中で知りあった旅客のなかに、新妻（新潟の豪農の娘）をともなってドイツ、イギリスに留学する文部省の給費生・東大社会学科の藤田喜作（一八八七～一九七三、旧姓・西原）講師がいた。藤田は瀬戸内海の〝中の島〟のひと。生家はまずしく、篤志家の援助によって学校をでた。長崎の鎮

西学院中学から六高をへて、東大の文学部社会学科、ついで法学部経済科にまなんだ。が、のちに東大教授となる道をすて、一私立中学の経営者となった。非常勤として出講していた某女子専門学校の教え子としたしくなり結婚したために、藤田家に入りむこになるとき世話になった恩師建部教授との関係がまずくなり、退官したと考えられる。

三木は東大講師の藤田にひじょうにいんぎんな態度をとった。後年、かれは弟・繁（一九〇八～七六）を藤田が経営する中学校に雇ってもらうために、同人に会いに行っている。

藤田喜作講師

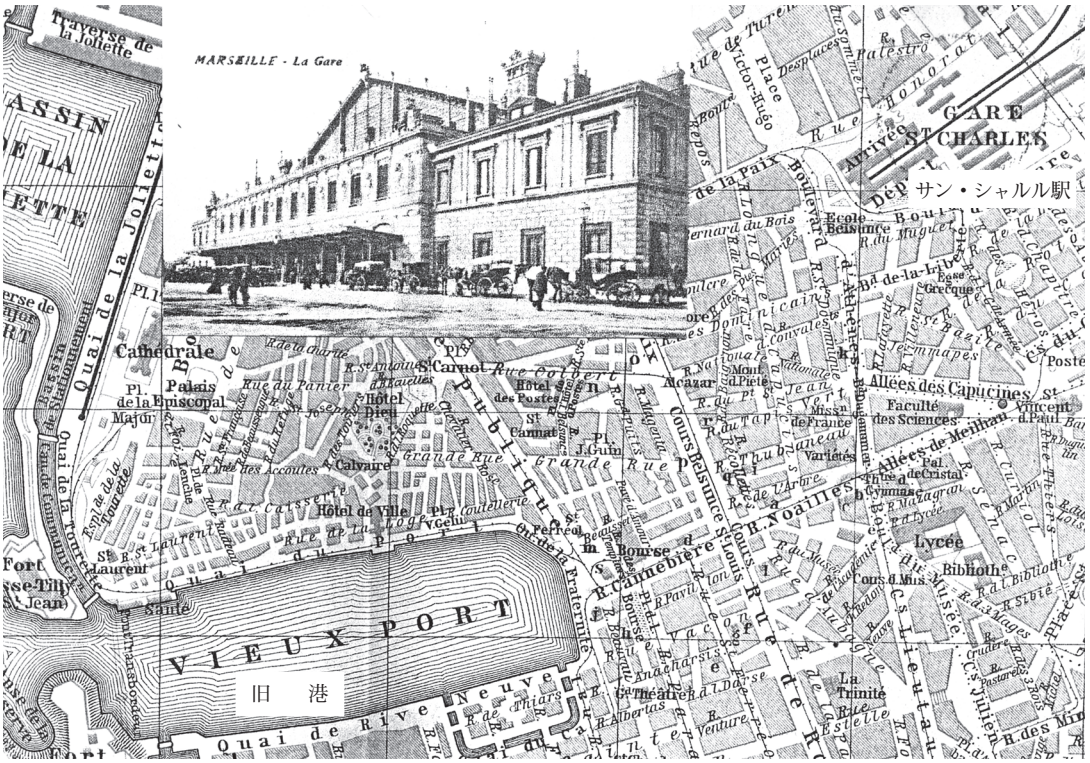
渡欧の船中における三木の動静についてはよくわかっていない。が、藤田に歴史には目的があるというようなことをいった。三木は船が、地中海を通るとき、ギリシャの独立戦争に参加しようとして、あえない最期をとげた英詩人バイロンについて感慨ぶかげに語ったらしい（蔵内数太「耳に残っている三木氏」（『三木　清全集　第18巻』の「月報」所収、昭和43・3）。

注・蔵内数太は、大阪大学名誉教授。藤田とは東大の社会学科の同窓。

谷川徹三（法大教授）によると、三木は三年半も外国にいたのに、見聞記をまったく書いていないという。かれはふつうの留学生のように、勉強をそっちのけにし、遊びまわるようなことをせず勉学にいそしんだ。が、〝眼の人〟ではなかったという。つまりかれは物をみる眼をもたなかった。三木と対照的なのは、和辻哲郎（一八八九～一九六〇、大正・昭和期の倫理学者・文化史家、法大、京大、東大教授を歴任）だという。和辻は留学の成果として『風土――人間学的考察』（岩波書店、昭和10・9）という独創的な書物をあらわしたが、それはふつうの旅行記や見聞記とはちがって、独自の眼から生まれた思想だという（谷川徹三「哲学者としての三木　清」昭和21・9、三木　清記念講演会における講話）。

当時の欧州留学生は、多少旅行記のたぐいを書き、雑誌などに発表することもあったが、三木はそのようなものを一つも書かなかった。谷川によると、三木は〝物をみる眼〟をもたなかったからだという。三木がいちばん関心があったのは、西洋の著名な哲学者の思想性であり、その構成要素を解明することに没頭するあまり、景色や世態人情、風俗などに眼がむかなかったのであろう。

べつないい方をすれば、三木は視野のせまい人――風物のわからぬ人――単眼の人であったといえる。さらに他のことばでいい換えると、視覚型の人間ではなく、思索型のタイプであったといえそうである。


MARSEILLE - La Gare
サン・シャルル駅
旧　港
VIEUX PORT
Cathédrale
Palais de l'Episcopal
Hôtel Dieu
Hôtel de Ville
Grande Rue
Cours Belsunce
Cannebière
Bourse
Lycée
Allées des Capucines
Allées de Meilhan
Quai de la Joliette
Quai de Rive Neuve
Fort St Jean
Fort St Nicolas
Place Victor-Hugo
Place de la Paix
Boulevard Rouvier
Place Carnot
Rue Colbert
Rue Paradis
Rue Sainte
Rue Longue des Capucines
Rue Paul Lecat
Rue Grignan
Rue Curiol
Rue Thiers
Rue Musée
Rue Lieutaud
Rue Noailles
Rue Saint Ferréol
Rue Caisserie
Rue du Panier
Rue Calvaire
Rue Couteillerie
Rue de la Fraternité
Rue Vacon
Rue Venture
Rue Estelle
Rue Pastoret
Rue Crudère
Rue Stalle
Rue Bibliothèque
Rue Musée
Rue Grignan
Rue Curiol
Rue Thiers
Rue Paradis
Rue Longue des Capucines
Rue Paul Lecat
Rue Sainte
Rue Colbert

外相）が、極右派ににくまれ、テロによって暗殺されたことを知った（一九二二・六・二四）。

三木がハイデルベルクにやって来るというニュースは、この学都にいる一部の日本人に知られていた。大内兵衛（一八八八～一九八〇、大正・昭和期の経済学者）がそのことを知ったのは、折から留学中の石原　謙（一八八二～一九七六、明治から昭和期のキリスト教史学者。のち東北大教授）からであった。石原は、三木という人は大変な秀才であり、将来京大の教授になる人だという話をした（大内兵衛「ハイデルベルクにおける出会い」『三木　清全集』第一巻、「月報」所収、昭和41・10）。

三木がこの町で暮らすとなると、下宿先をきめねばならぬが、かれは最初どこに身をおちつけたのか、その場所は不明である。しばらくペンズィオーン（簡易ホテル）でくらしたものと考えられる。またその世話をだれがしたのかもはっきりしないが、平野　謙をわずらわせたものであろう。

三木は大正十一年の六月すえにハイデルベルクに着き、約二ヵ月後にシュトゥットガルト（バーデン・ヴュルテンベルク州の州都）へ一泊旅行に出かけ、美術館などを見学したことを谷川徹三に、絵はがきをもって報告している。「私はその中に下宿を変ります」といい、宛名は――Bei Prof. Lemme. Heidelberg, Bergstr. 24. としている。この住所はかれがハイデルベルクで身をよせたところであろう。家主の Ludwig Lemme（1847～1927）は、新教の神学教授であった。のち三木は平野　謙が十月にハイデルベルクを去ってから、その下宿に移った。

ハイデルベルクの駅舎

ともあれ三木はハイデルベルクで、あい前後してつぎのような同胞と知りあいになった（「読書遍歴」）。

大内兵衛（一八八八～一九八〇、経済学者）
北　吟吉（一八八五～一九六一、哲学者・政治家）
糸井靖之（一八九三～一九二四、東京帝大法科助教授。ハイデルベルクの大学病院で急逝）
九鬼周造（一八八八～一九四一、大正・昭和期の哲学者）
大峡秀栄（一八八三～一九五一、禅僧）
鈴木宗忠（一八八一～一九六三、哲学者・宗教学者）

石原　謙（一八八二～一九七六、明治から昭和期のキリスト教史学者）
久留間鮫造（一八九三～一九八三、経済学者）
小尾範治（一八八五～一九六四、大正・昭和期の哲学者、のち文部省の課長）
阿部次郎（一八八三～一九五九、大正・昭和期の哲学者）
成瀬無極（一八八四～一九五八、大正・昭和期のドイツ文学者）
天野貞祐（一八八四～一九八〇、大正・昭和期の哲学者・教育者）
黒正　巖（一八九五～一九四九、歴史学者）
藤田敬三（一八九四～一九八五、経済学者）
森　五郎（一九〇一～八三、のちの羽仁五郎、昭和期の歴史家）

注・生没年と身分、ルビは引用者による。

三木が修学先にえらんだハイデルベルクとは、いかなる所であったのか。ここはフランクフルト［ヘッセン州］の南八十七キロ――ドイツ南西部――バーデンウェルテン州の古都である。一三八六年創立のドイツ最古の大学があることでその名が知られていた。当時の人口は五万、こんにちは十二、三万ほどか。

ハイデルベルクは、ゆるやかな山にかこまれた、いわゆる〝山あいの町〟である。いちばん高い山といっても、せいぜい、四、五百メートル位である。全体のながめは、スコットランドの高地地方と似ている。中央を流れているのは、ネッカー川。そこに十八世紀に架けられた〝古い橋〟と〝新しい橋〟（十九世紀）が、川の両岸をむすんでいる。旧市街地には〝城〟（シュロスベルヒの丘――海抜約六〇メートルに――十三世紀にルドウィヒ一世によって造られ、十七世紀末にフランス軍によって破壊されたもの。廃墟）や大学の校舎や図書館、大学附属の研究所があるほか、教会や古風な家がたちならんでいる。

川しもにある新市街は、カイスベルクの西の斜面につくられたものである。風情のない、都会の喧そうを逃れ、当地にやって来た者の眼には、ここは風光明媚なところに写るらしい。が、その景色はとくに美しいとはおもえない。しかし、川むかいのハイリーゲンの斜面――〝哲学者の道〟から、古城やそのふもとの旧市街――古い橋とネッカー川などを俯瞰したときの景観は、かくべつすばらしいものである。

ハイデルベルクは、ベルリンとはちがった意味で、日本の留学生に人気があり、かれらは聖地もうでのように、つぎからつぎとこの町にやって

店員に週給を支払うために積みあげた札の山。

きた。そのころハイデルベルクだけに限らず、いったいにどこの大学町でも日本人がかなりいたようだ。ドイツに数多くの日本人がやって来たのは、第一次世界大戦後の一九二〇年代に入ってからのことらしい。京大の滝川事件で、いちやく有名になった滝川幸辰（一八九一～一九六二、昭和期の法学者、のち京大総長）は、一九二二年の夏八月――友人の田村徳治とこの町をおとずれ、三日ほど滞在し、その間に町を見物した。

そのときリッカートの顔だけでも見ようと、哲学だか哲学史の講義室をのぞいてみた（注・聴講料をとる夕方からはじまる公開講座か）。すると前列の二列ほどが、黒い頭の日本人で占められていることを知って驚いたようだ（「ハイデルベルクの思出」『随想と回想』所収、立命館出版部、昭和12・12）。このエピソードは、滝川によると、当時いかに日本人が多かったかの証拠だという。

当時、日本人をドイツに引きつけたのは、マルクの下落と大いに関係があった。三木によると、例のラーテナウ外相が暗殺されて数日後には、為替相場がみるみる暴落した。英貨一ポンドが、千マルク以上になった。やがてそれが一万マルク――百万マルク――千万マルク――一兆マルクまでなった。日本からやって来た貧乏書生のじぶんなどは、銀行で五ポンド（英貨）換えると、ポケットに入れ切れないほどの紙幣をくれるので、急きょ〝書類かばん〟を持ってゆかねばならぬほどだったという（「読書遍歴」）。

第一次世界大戦で敗北したドイツは、ワイマル憲法のもと新たに共和制をしいたが、戦時賠償金がおもくのしかかり、国内的には失業難、食糧難、住宅難などにより、暴動やストライキがたえなかった。この国は経済的、社会的に疲へいしていた。折からインフレは進行中であったが、外相ラーテナウが、ロシアと友好条約をむすんだために、ドイツの国粋党員によってベルリン近郊において射殺された。この暗殺事件や国内の政治的不安、国際会議の不調など、複合的要因が引き金となって、マルクが暴落をつづけ、それにともなって物価もどんどん上っていった。

インフレの直撃をいちばんうけたのは、恩給や金利によってくらしているレントナー Rentner と呼ばれる人たちであった。かれらは日々のパンにもこと欠くようになっていた。一方、為替相場の恩恵をうけるアメリカ人や日本人は、ドイツに押しかけるようになり、ぜいたく三昧にひた

った。ここでいう日本人とは、役人（視察員）――会社員（駐在員、出張者）――教授連（観光、視察、留学でやってきた者）たちのことである。

これらの日本人は、ドイツにおいてインフレーション極楽を経験した。ひとはふだん持ちなれぬ大金を手にすると、考えることといえば、美食をし、芝居をみたり、高価な買物をすることであろう。あとは酒をのみ、美妓とたわむれるだけである。

いったい三木は、岩波からどのくらいの仕送りがあったのか不明だが、おそらくぜいたくできるほどの額ではなかったであろう。が、当時の官費留学生がもらった月額三六〇円ほどはあったものか。大正十一年（一九二二）八月中旬から翌十二年（一九二三）八月中旬までハイデルベルクでくらした阿部次郎のばあい、あるていど経済事情が判明している。

古城の上手にあるシュワルツ夫人方（ヴォルフスブルンネンヴェヒ十二番地）では――

一ヵ月の経費　部屋代＋（プラス）食費　約六〇〇〇マルク（日本円で二十一円に相当）。

注・阿部次郎「七　亡きあと　3」『阿部次郎全集　第七巻』所収、角川書店、昭和36・8。阿部の下宿先の家族は、シュワルツ夫婦とハンブルグの弁護士に嫁した娘が一人。長男・航空士官（22）は戦死した。りっぱな家庭だったという。

このころハイデルベルクの町で、二十銭もだすと、ちょっとしたものが食べれたという。一円か二円もだすと、すばらしいごちそうにありつけたと、大内兵衛はかたっている（『私の履歴書』河出書房、昭和30・4）。

人気教授ハインリヒ・リッカート（一八六三～一九三六）が、一九二二年（大正11）ごろもらっていた月給は、日本円にして三十円ほどであった、と阿部は人から聞いた話として伝えている（「遊欧雑記　獨逸の巻」『阿部次郎全集　第七巻』所収、角川書店、昭和36・8）。この額は、けっして潤沢なものではなかった。阿部によると、一ポンド三万マルクとして計算すると、月に九万マルク、年に約百万マルクになるという。老教授リッカートの給料ですらこの位であったから、若い教授や助教授のなかには十円以下の者もすくなくなかったはずだという。

こういった若いドルトル連中は、みな生活に困窮していたから、たのめば日本人のためによろこんで個人教授（哲学書の解説）をやってくれた。リッカートについては、日本人とのかかわりで、あるおもしろいエピソードがある。

ある日のこと、かれは門人のヘルマン・グロックナー（リッカート教授の下宿人）に、耳よりな話があるといってかれを驚ろかせた。――きょう一人の日本人のために個人講義 Privatissime（プリヴァティシメ）をやることにしたという。おとぎの国の金持のサムライである。名はクキ（九人の鬼（ノイントイフェル））男爵という。カントの『純粋理性批判』をいっしょに読んでくれという。

〝クキ〟とは他でもない、後年京大教授になる九鬼周造のことである。かれは美人の妻をともなってハイデルベルクに来ていた。かれはリッカートの私宅でおこなわれる講義にたいして高価なイギリスのポンド紙幣をたくさんあたえたから、リッカート一家は、インフレ時代を経済的にらくに乗り込えることができた。

リッカートは、九鬼からもらう〝エングリッシャー・フウントシャイネ〟（イギリス紙幣）の恩沢（おんたく）（めぐみ）をうけたばかりか、かれに胸像をつくってもらい、またカントの原典を再読する機会をあたえられ、〝新しい発見〟をした。グロックナーによると、九鬼がリッカートにした大いなる貢献とは、

一　個人教授による経済的利益。
二　胸像*をつくってもらったこと。
三　カントの『純粋理性批判』を再読することによって、新しい意義を発見したこと。

などであった。

＊フライブルク在住の息子の彫刻家アルノルトが製作した二体。うち一体は九鬼が日本へもち帰った。

注・生松敬三著『ハイデルベルク　ある大学都市の精神史』ＴＢＳブリタニカ、昭和55・6。加藤将之著『随筆　ハイデルベルクの神話　新カント派時代万華鏡』短歌新聞社、昭和47・12。Erinnerngen von Hermann Glockner: *Heiderberger Bilderbuch*, H. Bouvier u. Co. Verlag, Bonm, 1969 などを参照。

三木がハイデルベルクに入ったのは、例のラーテナウ外相が右翼の凶弾にたおれる直後――大正十一年六月二十四、五日ごろであった。かれを

歓迎する意図のもとに、

大内兵衛　（一八八八～一九八〇、森戸事件で東大をやめさせられてから、大原社会問題研究所に入り、やがてそこから派遣され、ハイデルベルクに二年留学した）

糸井請之　（一八八五～一九二四、大正十年（一九二一）文部省の在外研究員としてフランス留学をへてハイデルベルクにやって来た。が、大正十三年（一九二四）当地において病死。商品学、統計学、デュルケム的社会学の専門家）

森　五郎　（一九〇一～八三、歴史哲学と近代史の学徒）

ら三人は、六月末の月がでた夕刻のこと、三木とビールをのみながら夕食をとった（場所は駅前にある「ホテル・ツゥム・ポスト」の食堂）。

このとき三木は、京大の秀才として人から一目おかれ、いずれ西田の後継者となることを自他ともに許しているといった態度であり、うれしそうな様子だった（森　五郎「わが師　わが兄三木　清」――京大における講演）。

夕食をおえた四人は、ネッカー河畔に出ると、ボートをこぎだした。みなそれぞれボートこぎの腕前をみせ、やがて舟が中流に出たころ、あることが起った。それはこんど日本からやってくる三木という者をいろいろテストし、議論をぶっかけようといった陰謀だった。それをしかけた張本人は、糸井だった。

京都哲学とか西田哲学といったものは、本物かどうか。未来のドイツの文化は、幾百幾千行もあるゲーテの詩からではなく、ドイツの労働者のハンマー（かなづち）から建設されるのである。大内と糸井は、三木がリッカートのもとで研究しようとしていた文化哲学を批判しようとした。

まず大内が口火をきった。

――君、ゲーテという人は偉いのかね。

三木は突然、この問を聞くと、ちょっとびっくりしたような顔つきになり、大内の顔をまじまじと眺めた。ついで大内は第二の問いをはなった。

――ゲーテのどういうところが偉いのかね。

それに対して三木は、いわゆるドイツ理想主義的な伝統について、しっかりとした口調で話しはじめ、なぜゲーテはえらいのかを蘊ちくを傾け

て語った。が、わきでやりとりを聞いていた森ははらはらしたようだ。

審問者の大内はまたこんな質問をした。

――君は歴史哲学というものをやるそうだが、いったいそれはどんな学問かね。

それに対して三木は、歴史についての哲学だと答えた。が、大内は

――それだけではわからない。われわれの生活そのものが歴史ではないのか。

それ以前に、哲学のうちにも何か歴史の哲学というものがあるのかネ。

と、たたみかけた。三木は矢つぎばやの大内の問に圧倒された（大内兵衛「ハイデルベルクにおける出会い」『三木　清全集』第1巻「月報」所収、昭和41・10）。

森は三木が質問に対してどんな風に答えるかに興味があった。三木はいどまれたその後の議論（唯物史観）に対しては、ことば少なに答え、聞く側になり、さいごまで自分の立場を弁明しようとしなかった。そして幾分さみしそうに去っていった。森からすれば、京大の秀才、西田の後継者なら、それ位な一撃でまいるはずはないから、もうすこし反発のしようもあるはずである、と思うと、じれったかった。これがネッカー川の上（うえ）での三木の学力テストであった。

大正十一年の夏から、翌年の秋まで、――三木は森とほとんど毎日のように会った。三木がハイデルベルクをまっ先に留学地として選んだ理由は、西南ドイツ学派の書物をわりと多くよんでいたからであった。かれは当地において聴講生 Hospitant（ホスピタント）として著名な学者の講義に顔をだした。が、なぜかいずれも二、三回出席しただけでやめている。

三木がハイデルベルク大学の入学手続き Anmeldung zur Immatrikulation an der Universität Heidelberg をとったのは、一九二二年十月十六日のことであった。おそらく十一月から始まる冬学期にあわせて登録したものであろう。しかし、かれが用紙にみずから書き入れた記述をみると、間違いが多い。

一　洗礼名および名字 …… Miki Kiyoshi

二　生年月日 …… 5. Jan. 1898（ママ）

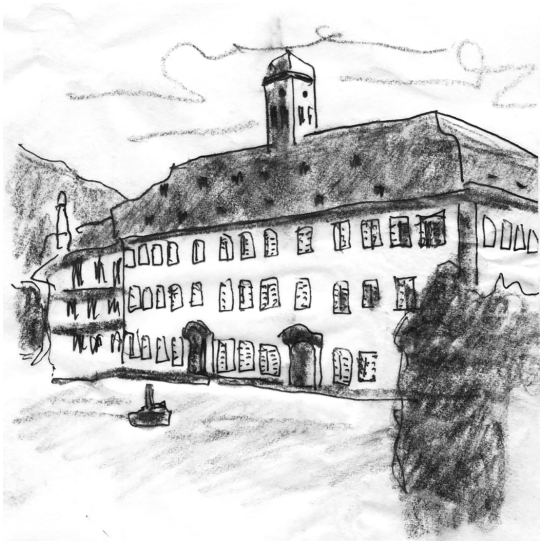
三　出生地 …… Kioto（ママ）, Japan
五　国籍 …… Japaner
六　父母または後見人
　の洗礼名および名字、…… Miki Seisuke. ein Kaufman in Kiot（ママ）, Nanzenji Katanobomachi 1.
　職業、出生地
七　信仰告白 …… Buddhist
八　研究名 …… Philosophie
九　学歴 …… Kiot（数文字あるが判読できない）zu Univ
十二　学生の住所 …… bei Prof. Lemme. Bergstr. 24 Heidelberg
この申告が正しい …… Die Richtigkeit dieser Angaben bestätigt Heidelberg den 16 ten Okt. 1922.
ことを証明する。 …… Unterschrift des Studierenden: K. Miki

注・Takara Baumbach und Thomas Lapré : Der Philosoph Miki Kiyoshi（1897-1945）を参照。Japanische Studenter in Heidelberg, 2013.

三木の生年月日は、明治三十年（一八九七）一月五日である。かれは一八九八年としている。これは誤りである。出生地は兵庫県なのに、「日本の京都」としている。これも誤りである。かれの父の名は栄吉（えいきち）（のちに清助（せいすけ）に改めた）といったが、その出生地は「京都　南禅寺カタノボ町一番地」となっている。これらの誤った記載は、理解にくるしむが、わるくいえばみずからの経歴を詐称し（いつわり）、虚偽の申請をしたことになる。

三木はいつごろから大学の授業やゼミナールに出るようになったのか明らかでないが、一九二二年（大正11）の冬学期からであろう。かれが受講した講義は、つぎのようなものか。

講義　ハインリヒ・リッカート（一八六三～一九三六）……教場はヘーゲル、クーノー・フィッセル、ヴィンデルバントらが講義したうす暗い教室。講義題目は不明。おそらく一九二二年の夏学期～一九二三年の冬学期は、認識論とゲーテについての講義があったらしい（羽仁五郎「三木　清がドイツ文で書いた論文四篇に



ハイデルベルク大学の校舎

ハインリヒ・リッカート

ついて」）。ほかに「カントよりニーチェまで」（現代の問題への歴史的導入）か。一週に四時間講義した（小尾範治「ハイデルベルヒより」『思想』第17号所収、大正12・2）。

このリッカートという先生は、ちょっと変わった持病があり、自宅（シェッフェル街四番地）を離れると〝不安〟を感じた。それは一種の神経性の病気であり、学生たちはそれを Platzangst（プラッツアングスト）（息苦しさ、臨場苦悶、広場恐怖症の意）とよんでいた。そのため大学へ行くときは、馬車か自動車を用い、いつも夫人とアウグスト・ファオストが書生のように付きそった。教授会はきわめてまれに出席するだけ、社交会はまったく出ず、ごくたまに弟子のヘリゲルと〝哲学者の道〟を散歩するくらいであった（北　聆吉著『哲学行脚』、五四頁）。

カール・ヤスパース（一八八三～一九六九、ハイデルベルク大教授。実存主義者）……ニーチェやキエルケゴールについて講義していた。

エルンスト・ホフマン（一八八〇～一九五二、プラトン研究家）……ホフマンはギリシャ哲学について講義していた（前掲、羽仁五郎）。三木はインフレに苦しむ同人を救済するため、論文「アリストテレスの教説に於ける神と存在」を執筆させ、それを和訳し、『思想』（大正13）に発表し、その原稿料を本人にあたえた。後年ホフマンはハイデルベルク、ルプレヒト・カー大教授を歴任した。

フリードリヒ・グンドルフ（一八八〇～一九三一、ドイツの文学者・詩人。ハイデルベルク大文学部講師、のち教授）……『シェイクスピアとドイツ精神』（一九一一）、『ゲーテ』（一九一六）その他の著作がある。講義名は不明。ドイツ文学に関したものか。

三木によると、リッカートの著書はすべて読んでいたので、その講義から「あまり新しいものは得られなかった」が、この老教授の風貌に接することができ、あたかも哲学の伝統に接したように思われたのしかったという（「読書遍歴」）。しかし、聴講を途中からやめたようだ。

三木はヤスパース、ホフマン、グンドルフの講義も、数回出席しただけでやめている。なぜか。理由はなんとでもつけられるが、主な原因は語学力（聴解力）にあったと思われる。つまり講義についていけなかったのではないか。明治以降――昭和五、六十年代ごろまで、日本人はほとんど外国人から直接教授法で外国語をならうことなく（いまと違って外国人がすくなかった）、おもに日本人教師から漢文を習うように語学をおそ

カール・ヤスパース

フリードリヒ・グンドルフ

わった。英語を例にとると、学力がじゅうぶんでない日本人教師から、日本語で訳読・文法・英作文をならい、会話に至っては空白のままであった。それは外国語の授業なのか、国語の授業なのか区別がつかないものであった。ただし、キリスト系の学校は別であり、外国人教師から口頭教授法で授業をうけたようだ。

日本人は、およそ実用的語学からほど遠い、いびつな英語をならった結果、大半は聴き取ることも、文章を正しく読むことも、書くことも話すことも満足にできぬ、語学不具者になった。中途半端な学力しか身につかず、いびつなままに終った。

旧制高校（修学三ヵ年）は、ふつうの私大の予科（修学二ヵ年）よりも語学時間が多く、週に十二時間あって、語学学校のようであったという。が、そこでドイツ語やフランス語を数年間専修しても、とても修得できるものではなかった。学校秀才たちも形なし、語学的には不完全であった。

三木のドイツ語の学力は、相当なものであったと想像されるが、ドイツでかれと親しく交わり、リッカートの演習にいっしょに出席した森　五郎によると、かれのドイツ語はあまり上手とはいえず、そのふつうのドイツ語をきくと、人からばかにされるほどのものであった。三木のドイツ語の発音はきれいとはいえず、たとえば zeitigen（ツァイティゲン）（熟させる、成果などをもたらすの意）を〝ツァイチィーゲン〟と発音し、人を笑わすほどユーモラスなものであった（「わが師　わが兄三木　清」）。

日本人は語学へたに加えて、恥らい、引っ込み思案の性格から、進んで人前でじぶんの意見をのべたり、研究発表をすることなく、ただ座して、だまりこくっている場合が多いが、三木はリッカートのゼミナールにおいておくすることなく、例の変なドイツ語で三回もレポートをよんだ。じつにみあげた度胸である。

肩書きがものをいう日本社会では、官学の先生は高等官であり、いばっておれるが、いったん外国に出ると、大学教授でありますといっても、人から何とも思われず、へたな発音で変なことばを聞かされた者からバカにされるだけである。まして白人社会では、東洋人なぞあなどられ軽んじられるきらいがあるから、しぜん語学のできぬ日本人は寡黙にならざるをえない。

吉野作造（一八七八～一九三三、明治から昭和期の政治学者。欧米留学後、東大教授）は、明治四十三年（一九一〇）から三ヵ年政治学・政治史研究のため、ドイツ・イギリス・アメリカに留学した。ドイツではまっ先にハイデルベルクをおとずれ、大学の講義を聴講したが、著名な学者の講義も「頗（すこぶ）るツマラヌものである」ことを知り、ばかばかしくて聞いておれぬ、と酷評した。が、かれのドイツ語の力、その聴解力はじっさい

大したことはなかったのではないか。じぶんのドイツ語の力をたなにあげ、負け犬の遠ぼえのように講義者を罵倒しているようにもみえる。

守屋貫教（一八八〇～一九四二、明治三十九年［一九〇六］東京帝大文科大卒、のち立正大学長）は、大正十年代にドイツに二ヵ年半ほど留学し、ベルリン大、マールブルク大で受講した。ベルリンでは一ヵ年滞在し、大学に入る予備段階としてベアリッツの語学学校に通ったり、若い大学生をやとい哲学書をよんでもらったりした（「伯林の一年」『法華』大正13・6）。

ベルリン大学の入学式は五月におこなわれ、その後講義がはじまると、守屋は一週七、八時間聴講した。が、どの講義もよくわからなかった。「じぶんの知って居る事のいくらか見当がつく位の程度」であったという。それでも守屋は、ずいぶん辛ぼうして聞いたという。語学力のせいで、よくわからぬ講義を二時間もつづけて聞くのは、苦痛以外の何物でもなかった。（いっそう下宿に引っこんで、本でもよんだ方がましだ……）と、何度も思った。しかし、聴かねば、いつまでたってもわからぬ、と腹をくくって大学に通った。聴きとれなかったのは、大学の講義だけでなく、子どもや女中が話すことば、人の談話すらさっぱりわからなかった。

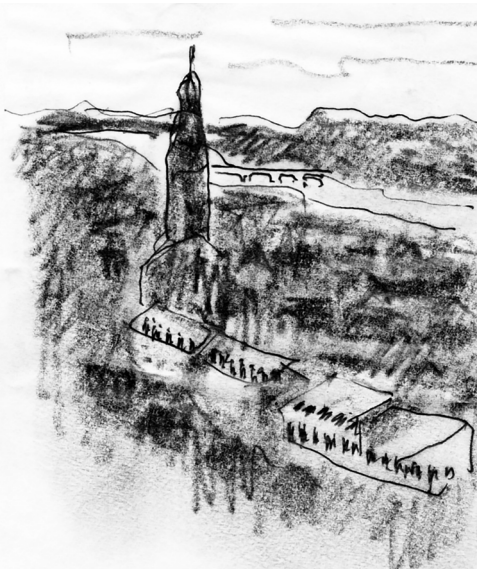
阿部次郎のばあいは、ハイデルベルクで大学の講義を受けず、この「大学町に隠れるやうな気持になって引籠った」のである（「私の外遊中に与へられた問題」日本女子大における文芸研究会歓迎会における講話、大正12・10）。

かれはどうせ受講しても、よくわからないだろう、とおもい、隠者のように家に引きこもり、読書だけに専念したものか。

立正大学　第12代学長のころの守屋貫教

和辻哲郎（一八八九～一九六〇、大正・昭和期の倫理学者、文化史家。法大教授、京大助教授をへてドイツ留学後、京大・東大教授）は、昭和二年（一九二七）二月中旬、道徳思想史を研究するために、文部省の在外研究員として神戸よりドイツへ旅立った。

船がマルセーユに着いたのは三月二十七日のこと。この港町で一泊したのち、パリへむかい、翌日の夜パリについた。十日ほどパリですごしたのち、四月上旬にベルリンに着くと、ヘルマン方に下宿した。かれはドイツでどうすごすべきかといった明確な計画も目的もなかったようだ。ドイツの本をたくさん読もうとか、また何かをせねばならぬ、といった義務はなく、気がらくであった。



ハイデルベルクの夜景

ただドイツに入国して早々、教師のもとへ通ってドイツ語のけいこを始め、作文などを添削してもらっている。やがてベルリン大学の夏学期の聴講生（ヘーラー） Hörer となったのは、四月末のこと。それが一ヵ月もたたぬうちにやめてしまった。「今日は講義のある日だが、もう講義は見限（みかぎ）った（見込みがないとおもい、あきらめてやめる意）」という。なぜか。それはやはりことばの壁に原因があったようだ。

かれはドイツ文を読むことにさほど不自由しなかったにせよ、ドイツ語を二時間ちかく（じっさい講義は定刻より十五分おくれて始まるので、一時間四十五分ほどか）心をひきしめて聴くことはできなかった。本人によると、よくわかる講義は、内容が簡単すぎてつまらなくなり、早口でまくし立てられる講義は、わからないのでバカバカしくなったという。「結局第二週目の中程（なかほど）からずべって（なまけて）了（しま）ってあまり出なくなった」。

和辻はことばが不自由であったために、講義は半分ほどしかわからなかった、といい、集中して聴くことができなかったようだ。ドイツ語をしゃべったり、聞いたりする点では、「こちらは話にならない程低能（ほどていのう）だが」と、運用面の力のないことをすなおに認めたが、ベルリン大の教授らの学問上の理解や仕事が、じぶんよりはるかにすぐれているとは思えなかったという。これなどはじぶんの学力の自信のほどを買いかぶったことばであろう。

かれも吉野作造とおなじように、じぶんの語学力をたなにあげ、講義者をそしる側に立ち、講義内容も感心できなかったと岩波茂雄に書簡をもって知らせている（昭和2・5・15付、『和辻哲郎全集　第25巻』所収）。

じっさい講義を半分聞いて理解できれば、じゅうぶんそれについてゆけるはずだが、和辻は半分はおろか、ほとんどわからなかったのではなかろうか。そこでかれはじぶんの聴解力不足や半解を相手のせいにし、じぶんの学力のなさを正当化したものであろう。

和辻は十一月一日、ベルリンを去り、パリへむかうのだが、途中でヴュルツブルクをへて十日にハイデルベルクに着いた。汽車がネッカー川の谷に入ったとき、山の形からつい日本の風景をおもいだし、蘇生した気持になった。ハイデルベルクには、二晩とまり、有名教授リッカートの講

義をきいてみた。が、「老衰のせいか声が低くてはっきり聞きとれなかった」という。当時、リッカートは六十四歳。病身ということで、教壇にあがらず、教室のすみの机のわきにすわって講義していたという（11・15付、妻・照子宛書簡）。

三木がハイデルベルクにいたころ、ドイツ人は超インフレに苦しみ、黒パンとじゃがいもを食べ、かろうじて飢えをしのいでいた。民衆の話題はいつも物価のこと。物質的窮迫はかれらの顔色や身なりにも現れるようになっていた。身辺にある窮迫したドイツ人をみてふびんに思うのが人情とすれば、他をかえりみず、自分本位に生きている者もいた。

一部の日本留学生は、学問より為替相場のほうがおもしろくなり、それに熱中し、大もうけするまでになった。阿部次郎は、銀行で得意気に大金をうけ取っている二、三の日本人の顔をみるのが何となく恥しかった。かれはハイデルベルクに来る前の七月八日――午前十一時ごろ、ベルリンのドレスデン銀行で金をおろした。信用状で三〇ポンドひき出したとき、六万八〇〇〇マルクあまりのドイツ紙幣をくれたが、分量が多くて持ちきれぬほどであった。相場は一ポンドが約二千三〇〇マルクということだった。

阿部はドイツ人に対して何かわるいことをしているような気がし、だんだん銀行へ行くのがいやになった。かれは一ヵ月分の予算に相当する金だけをおろすようになり、みすみす損をした。ハイデルベルクの若いフィロゾーフ（哲学者）はみな貧乏であった。だから為替相場のめぐみを受けている裕福な日本人から、これこれしかじかの本を読んでくれといわれると、みな喜んで要望にこたえ、個人教授してくれた。三木や森は、左記のドイツ人を家庭教師として学んだ。

阿部次郎

オイゲン・ヘリゲル……三木は他の日本人留学生とともに、ヘルダーリンの『ヒュペリオン』をよんでもらった。

ロベルト・シンチンゲル（一八九八～一九八八、ドイツの哲学者。ハンブルク大卒）……三木はホフマン教授の紹介でプラトンをよんでもらった。大正十二年（一九二三）来日し、旧制大阪高校、東北、京都、東京帝大、学習院で教鞭をとった。

ヘルマン・グロックナー（一八九六～一九七九、リッケルト教授の下宿人）……三木は羽仁五郎といっしょに、ヘーゲルの『精神現象学』をよんでもらった。グロックナーは、後年、ブラウンシュヴァイク工科大教授になった。

カルル・マンハイム（一八九三～一九四七、ドイツの社会学者）……三木は羽仁五郎といっしょに、毎週おとずれ、二、三のドイツ人学生とともにマクス・シェーラー（一八七四～一九二八、ドイツの哲学者、社会学者）の知識社会学の話を聞いた。

三木によると、インフレ下のドイツ人の不幸は、日本人留学生にとって幸福であったという（「読書遍歴」）。

三木はハイデルベルク――マールブルク――パリと修学先を変えてゆくのだが、どこへ行ってもあまり人と交際せず、多くの時間を下宿における読書に使った。人間ぎらい（ミザントロープ）人かと思われるが、そうではなく、気があう人間ならよく会ったようだ。たとえば、美青年の森とは毎日のように会っている。両人はゼミナールや読書会の帰り、よく大学前にあるワイスという本屋に入り、本をあさり、求めたりした。三木は惜しげもなく本を買うと、それをどんどん日本に送らせた。三木の弟・繁は、洋書がいっぱいつまった大きな木箱がときどき届くと、それをバールを使って開けねばならなかった（注・筆者はこの話を繁氏から直かに聞いた）。

このようにドイツ語をよむことにかなり習熟した学者ですら、会話や聴きとることとなると、おてあげであった。三木もけっしてドイツ語の練達の士ではなかったであろう。だから早々に受講にみきりをつけたものと考えられる。

しかし、かれは演習（ゼミナール）や読書会には熱心に出席している。

演習　ハインリヒ・リッカート（一八六三〜一九三六）……ゼミナールは山のふもとにある自宅でおこなわれ、用書としては、自著『自然科学的認識の限界』およびマクス・ヴェーバー（一八六四〜一九二〇、ドイツの政治経済学者・社会学者）の『学問の方法論』などを用いた（羽仁五郎）。

一九二四年（大正13）の夏学期――リッカートと近所に住むホフマンは、共同ゼミをひらきテアイテトス（前四一五？〜三六九、ギリシャの哲学者・数学者）のものを用書として用いた。リッカートは、体系的に、ホフマンは歴史的、語学的に学生を訓練した。このころ三木はマールブルクに移動しているから、当然このゼミをとっていない。

リッカートがつねずねいっていたのは、哲学徒が大学で目標とせねばならぬのは、「論理的訓練と歴史的育成」logische Schulung und historische Bildung の二点であった（天野貞祐「ハイデルベルク学派の人々」『天野貞祐著作集　Ⅳ』所収、昭和24・10）。

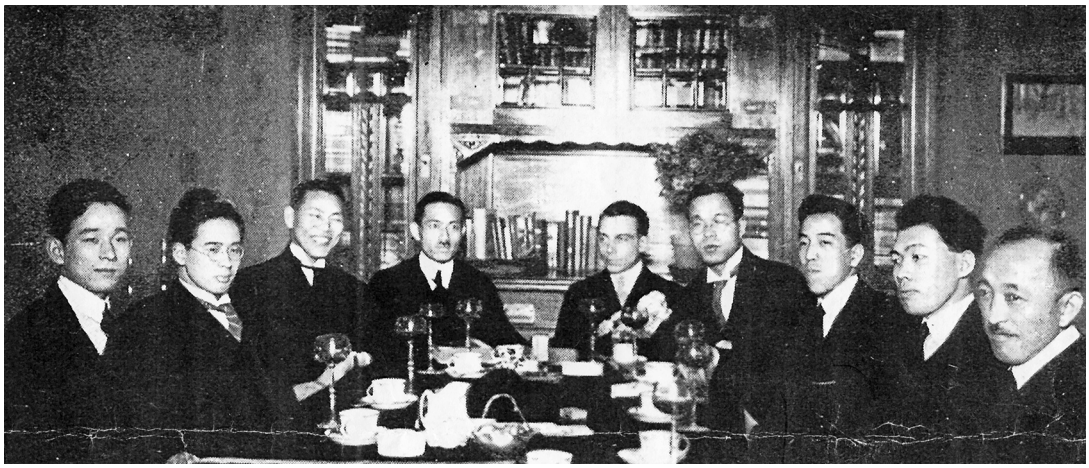
演習　エルンスト・ホフマン（一八八〇〜一九五二、プラトン研究家）……三木は朝早くから、同人のギリシャ古典演習に出ていた（羽仁五郎）。

講義および演習　オイゲン・ヘリゲル（一八八四〜一九五五、ハイデルベルク大私講師、のち東北帝大教授。西南ドイツ学派の思想を日本に伝えた。一九二九年［昭和4］エルランゲン大教授）……ヘリゲルは一九二三年（大正12）の夏学期――講義のほか、演習として「むずかしい論理学上の問題――ボルツァーノ、ロッツェ、ヴィンデルバント、リッカート、ラスクなどを参照して」Übung: Schwierigere logische Probleme（unter Bezugnahme auf Bolzano, Lotze Winderlband, Rikert, Lask）をおこなっていた（土、午前10〜12）。このとき三木は、「論理学における客観主義」Der Objektivismus in der Logik を発表した。

またヘリゲルは、このころカントの『プロレゴメナ』をテキストに用いる演習をおこなった。ヘリゲルは、当時ハイデルベルクにいた日本人留学生の指導者（メントア）のひとりであった。三木はこのゼミでベルンハルト・ボルツァーノ（一七八一〜一八四八、チェコの数学者・哲学者・神学者）について報告し、のち『思想』に発表した。

私的な演習　ヘルマン・グロックナー（一八九六〜一九七九、リッカート教授宅の下宿人。のちブラウンシュヴァイク工科大教授）……日本人留学生のためにヘーゲルの『精神現象学』Phänomenologie des Geistes を用書とする演習をひらき、大峡秀栄（おおはざましゅうえい）（一八八三〜一九五一、東大文卒、禅僧、成蹊高校教授）が借りていたボルンハウゼン夫人宅の二階にあつまった。このとき三木も出席した（写真を参照）。

注・羽仁五郎「三木　清がドイツ文で書いた論文四篇について」『三木　清著作集　第二巻』所収、岩波書



1922年（大正11）大峡秀栄の下宿での読書会（於　ハイデルベルク）。

小尾範治
能代猪三雄
羽仁五郎
三木　清
中央の外国人は，ハイデルベルク大の私講師オイゲン・ヘリゲル
大峡秀栄
花戸龍三
藤田敬三
後藤富夫

三木がハイデルベルクで知り合った日本人のプロフィールについて述べてみよう。

かれがこの町で最初に会った日本人は、おそらく石原　謙（一八八二～一九七六、明治から昭和期のキリスト教史学者。留学後、東北大教授、東京女子大学長を歴任）であったかと思える。かれは三木のために、下宿その他の世話をしたふしがある。三木を石原に紹介したのは京大の波多野精一であったろう。

東京帝大の文科大学講師として古代・中世哲学史を講じていた石原は、早稲田や東京女子大へも兼任講師として出講していた。が、大正十年（一九二一、三十九歳）、文部省在外研究員として渡欧することになり、五月上旬貨客船「加茂丸」にのり神戸を出帆し、五十日の洋上生活ののち六月末にマルセーユに上陸した。その後、パリにむかい、この市で十日ばかり見学に時をすごしたのち、七月八日ドイツへむかった。ベルリンでは森戸辰男にむかえられ、この市で二週間ほどすごした。七月末にハイデルベルクにむかい、大内兵衛の出むかいをうけ、下宿その他の世話になった。

山の中腹にある老夫婦のシュワルツ家に旅装をとき、この家で、夏の三ヵ月をすごし、のちにレンメ教授宅に移った。午前中は読書し、午後はドイツ語のけいこのために教師宅をおとずれた。十月より神学科のヴォッバーミン、ディベリウス、シューベルト教授らの講義や演習に出席し、翌年の十月まで

店、昭和24・7。

ハイデルベルクですごした。その後、スイスのバーゼルに転じ、イギリス、アメリカをへて大正十二年（一九二三）十月帰国した。翌年、東北帝大の招へいをうけ、法文学部の教授に就任した。

石原は、二ヵ年半にちかいドイツやスイス（バーゼル）における留学の成果について、「些少の語学を習得し、大学の講義を聴講し、学界の見聞を広くした」が、それはじぶんの教養にこそ役立っても、日本の学界への土産にはならなかったという。

旅行の範囲は、ドイツ語圏内のドイツ、スイスとイタリアに限られ、あとは帰国時にフランス、イギリス、アメリカを通過したにすぎなかったが、どこの国も語学力不足のため親しめなかったようだ（「学究生活五十年」）。

滝川幸辰（一八九一～一九六二、昭和期の法学者。京都地裁判事をへて京大教授）は、文部省在外研究員として留学先をドイツに定め、大正十一年（一九二二）四月末にベルリンに着くと、夏学期からベルリン大学において、法哲学・法学史・犯罪心理学・教会法などを、冬学期にはフランクフルト大学において、国家哲学・刑法・刑事訴訟法・労働賃金法・一般社会学などを聴講した。が、講義を聴きとることに困難を覚え、ときにかんたんなことばも聞きとれず、不安になったり、いらだたしい気持になったようだ。

ベルリン大における夏学期――講義の「内容の理解よりも聴き取ることに骨が折れ随分もどかしく感じた」という（「フランクフルト大学」『随想と回想』所収、立命館出版部、昭和12・12）。この文章などは、本人の負けおしみを示すものか。内容の理解と聴きとりが転倒している。なぜならちゃんと聴きとれてこそ、講義内容が理解されるものだからである。

三木を最初にいじめ役として審問した大内兵衛（一八八八～一九八〇）は、森戸事件で東大をやめさせられてから大原社会問題研究所から森戸といっしょにドイツに留学させてもらった。第一次世界大戦がおわった直後のことであり、日本がドイツからとりあげた太洋丸の一等船客として渡欧した。マルセーユに上陸し、パリで一週間ほどすごしたのち、ドイツに入った。ベルリンでは革命後の荒廃した市民社会を見、約一ヵ月滞在したのちハイデルベルクに移った。

大内はマルキストではなかったが、マルクス主義を勉強する必要を感じていた。マルクが安いときであったから、生活にこまらず、洋服のポケットはいつも紙幣でいっぱいだった。大内はハイデルベルクに二年いた。ドイツ・インフレのおかげで金はいくらでもあるし、景色はいいし、酒はうまいし、毎日酒をのみ、うっとりとした気分でいた（大内兵衛著『私の履歴書』河出書房、昭和30・4）。

昼間は週に三、四回、大学の講義をきき、夜は週に一回エミル・レーデラー助教授（一八八二〜一九三九、ドイツの経済学者。のちにナチスに追われアメリカに亡命）の演習に出席した。その他、課外として、久留間鮫造の下宿屋の娘さん（学校の先生）に、ドイツ語をならい、ゲーテの「ファウスト」やハウプトマンのものを読んでもらった。ほかにポーランドから来た亡命女教授に、ローザ・ルクセンブルク（一八七〇〜一九一二、ポーランド生れのドイツの女性社会主義者。ドイツ共産党の創立者）の『資本蓄積論』（一九一三年）などをよんでもらった。

いちばんよく聴いたのは、マックス・ヴェーバーの弟――アルフレート・ヴェーバー教授（一八六八〜一九五八、ドイツの経済地理学者・社会学者。のちナチスに追われる）だったという。大内は対談において講義はよく理解できたのかと聞かれたとき、「だいたい筋はわかったけれども……」といい、七、八〇パーセントはわかったと、自信のほどをのぞかせているが、このことばは実力以上に大きなことをいったものであろう。また「筆記していたけど、うまくできなかった」と答えている。満足にノートを取ることができぬ者が、どうして講義のあらましがわかるのか、ふしぎな気もする。

糸井靖之（一八九三〜一九二四）は、数え年の三十二歳のとき、ハイデルベルクの大学病院で亡くなった（大正13・12・13）。糸井は京都のひとである。宮津中学、一高をへて東京帝大の法科大学商業学科にまなんだ。統計学を専攻し、卒業後、助手、助教授となり、文部省在外研究員としてまずフランスに留学し、パリ大のフランソワ・シミアン教授に師事した。

かれはオーギュスト・コントやデュルケムの社会学、数学、統計学、物理学的哲学などにくわしく、フランス文化畑の人であった。ドイツ語はじゅうぶん出来なかったから、大内などに助けられた。ハイデルベルクでは、ドイツ哲学、リッカートの文化科学、物理的自然科学の哲学などを大内とともに勉強し、議論した（米沢治文［東北大］「資料　糸井靖之について」『統計学』第18号所収、経済統計研究会、昭和43・3、大内兵衛著『私の履歴書』河出書房、昭和30・4）。

業績としては、論文「世界ゴム価格変動の研究」（助手の任期満了のとき執筆したもの）があるらしい（未見）。ほかに『国家学会雑誌』（大正8）に発表した翻訳が三篇（「仏国労働組合の近況」「優生学と経済学」「生活費変動の測定」）あるほか、大田信吉との共訳――E・W・ケムメラー著『物価決定の法則』内田老鶴圃、大正10・9）がある。書いたものは少なく、公に発表したものはぜんぶほん訳ばかりであり、「何としても物足りない感じが残る」（米沢治文）という。翻訳は、人がかいたものを国語に移したものにすぎず、研究した成果でないからである。

森　五郎（一九〇一～八三）は、三木と知りあったころ二十歳の美青年であった。糸井のあとハイデルベルクにやって来て、大内らとの付きあいがはじまった。かれは大内や糸井らに、毎日むずかしい問題を提起されさんざんいじめられた。森は大正十年（一九二一）に一高を出ると、東大法学部に入り、上杉や美濃部らの講義をきいたが、やがてそこで法律をまなぶことの意義について疑いをもつようになった。

ドイツでは第一次世界大戦がおわってからインフレがはじまり、マルクがひじょうに安くなってきた。そのころ日本で月四、五十円で生活できる金があれば、ドイツで勉強できると思われた。そこで人にも相談したところ、大方の者は留学計画に賛成してくれた。大正十年九月、森は日本を発ってドイツへむかった。かれがハイデルベルクを目ざしたのは、そこにいるリッカートについて歴史哲学を学ぶためであった。

この学問をまなぼうとしたのは、学問上の問題からではなく、じぶん自身の人生問題――じぶんが滅びゆく過去の階級（ブルジョア）に生まれ、そこに埋没して死んでゆくことに対する疑問――大正七年（一九一八）の米騒動がきっかけとなり、各種の社会主義運動が活発になり、労働階級によって新しい社会がつくられつつある状況を知り、そういう階級に対してどんな貢献ができるかを考えるようになったからである。また歴史の過去と未来とのつながりを考えたとき、リッカートから、そのような問題が聞かれるかも知れぬとおもってハイデルベルクにやってきた。

大内、糸井、森、三木らは、毎日でる歴史哲学の小冊子（ブロシューレ）（五〇ページ位のもの）をよむのが忙しく、それをよんで、夕飯のあとネッカー河畔にあつまると、みなで討論をした（「わが師　わが兄三木　清」）。

久留間鮫造（くるまさめぞう）（一八九三～一九八二）は、岡山のひとである。大正七年（一九一八）東京帝大法科大学政治学科を卒業し、翌八年大原社会問題研究所に入ると、マルクス経済学（とくに『資本論』）の研究に従事した。大正九年（一九二〇）十月から十一年（一九二二）八月までドイツ・イギリスに留学し、社会・労働関係の貴重書の収集につとめた。かれがハイデルベルクにやって来たのはいつのことか不明だが、一九二二年（大正11）の晩夏にこの学都を去っている。昭和二十一年（一九四六）法政大学教授に就任。昭和二十四年（一九四九）同研究所が法大に移管されると所長となり、昭和四十一年（一九六六）までその任にあった。

多くの編著書があるが、代表的なものに『経済学史』河出書房、昭和23・7、『恐慌論研究』新評論社、昭和28・6、『マルクス経済学レキシコン』（全十五巻）大月書店、昭和43～昭和60などがある。

ハイデルベルクの北　聆吉

北聆吉（一八八五～一九六一）は、新潟県佐渡のひとである。大正・昭和期の国家社会主義者・北一輝（一八八三～一九三七、二・二六事件で刑死）の弟である。明治四十一年（一九〇五）の秋――早大文学部哲学科を卒業後、茨城県立土浦中学校の英語教師となり、このときのちにハイデルベルクにやって来る大峡秀栄と知りあいになった。大正三年から七年まで（一九一四～一九一八）早大講師をつとめ、その後大東文化学院教授となった。大正七年（一九一八）九月のはじめ、三土忠造（一八七一～一九、明治から昭和期の政治家。『東京日々新聞』の記者をへて衆院議員、のち文相、蔵相）の支援により外遊の途にあがり、横浜より諏訪丸にのりアメリカへむかい、それよりヨーロッパに渡り、各国を巡遊して、ハンブルクより船客となり、同十一年（一九二二）十二月末、神戸に帰った。この間、外国で四年四ヵ月すごした。

北は大正十年（一九二一）の春、ベルリンを辞し、ハイデルベルクをめざした。当時、マルクはどんどん下落し、月百円もあれば裕福な生活ができた。はじめこの学都で四ヵ月ほどくらすつもりであったが、計画を変更し、翌年の秋のおわりまで滞在した。ハイデルベルクの下宿は、新聞広告によってみつけた。そこは四人のかなり大きな子女をもつ未亡人宅であった。亡夫はマンハイムの有名な会社の副技師長であったが、三、四ヵ月まえに亡くなった。

北の下宿の向い側の家に、二十一年の冬から、親友の禅僧・大峡秀栄が住んでいた。そこも三人の子供をかかえた家であり、夫からの月々の仕送りだけでは一家を支えてゆくことができなかった。大峡は家族の生活のすべてのめんどうをみ、じぶんと同じ食事を子供たちにも分けあたえた。夫人は大峡のことを、「天から送られて来た人」（苦しむ人の真の友）とたたえた。

そのころ比較的くらしむきがよかったのは、つぎのような人びとだったという。

資本家……専業の経営者は、マルク相場がひくいため、従業員の賃金をひくく押えられた。輸出がふえ、利益をえた。外貨で取引する者は、それをマルクにかえ、有利に利用できた。
小商人……マルクが下落すると、自由に物価をつりあげることができた。
農夫……とくにバイエルン方面の農夫は、マルクが下落すると、農作物を高く売った。
労働者……輸出の伸びにともない生産性があがると、失業する心配がへった。マルクが下落すると、労賃の値あげを要求したから、生活は大して悲惨ではなかった。

当時、ドイツでもっともみじめであったのは、戦争未亡人であったという。ついで教師、官吏、牧師、会社員など、いわゆる月給とりであった。生活苦から、ベルリンなどでは春をひさぐ女性が急増し、街に大勢すがたをみせるようになった。

北はベルリンよりハイデルベルクに移るまえに、ハイデルベルク大学の事務局に入学できるかどうか問い合わせの手紙を出している（一九二一・三・九付）。また手書きのきれいな筆記体の履歴書を書き送っている。すなわち、つぎに引く文章がそれである。

内容は、佐度島（さどがしま）に生まれ、小学校を出たのち、中学（ドイツのギムナジウムに相当する）を卒業し、ワセダ大学で文学や哲学をまなんだという。大学卒業後、茨城や東京の中学校の教員となり、その後母校のワセダに招かれ五ヵ年哲学をおしえたという。その後ハーバード大で一年まなび、いまベルリン大で勉強しているといい、以下それまでに発表した業績にふれ、署名している。

北は大学の講義がはじまる前に講堂（アオラ）にあつまった学生のすがたをみたとき、一驚を喫した。戦場から帰った者が多く、中には片目の者、手足に負傷の痕がある者、顔に弾傷や刀傷の痕跡をもつ者もいた。みな粗末な衣服を身につけ、粗食をとり、蒼白い顔をしていた。それにくらべ北は、為替のおかげで、よい身なりをしていたから恥しい思いをした。

Lebenslauf

Ich, Professor Reikichi Kita, bin geboren am 1885 Juli 21 in Sado, Japan. Ich besuchte die allgemeine Schule neun Jahre und dem die Chugakko, etwa dem deutschen Gymnasium endsprechend, fünf Jahre. Ich habe das Abgangesexamen dieser Schule bestanden und dann an der Wasseda（ママ）-Universität zu Tokio Literatur und Philosophie studiert.

Nach Absolvierung der Universität und Ablegung der vorgeschrietenen Examina wurde ich Lehrer an der Chugakko in Iwaragi（ママ）und dann an der Chugakko in Tokio. 1913 bekam ich einen Ruf an die Universität zu Tokio (Wasseda-Universität) und lehrte dort 5 Jahre lang Philosophie, 1918 bis 1919 studierte ich wiederum an der Harvard-Universität. Seit 1920 studiere ich an der Universität Berlin.

Meine Veröffendlichungen sind,

1. Übersetzung: Prof. T. K. Rogers' Students' History of Philosophy.
2. 〃 : Prof. Höffding's Geschichte der neueren Philosophie.
3. Kritische Darstellung der Philosophie von Bergson.
4. Zwei Bücher über sociale und moralische Probleme.

Berlin, Spessartstr. 13. R. Kita

(Wilmersdorf)

あるとき北は、両替のために銀行へいき、邦貨百円ほどをマルクにかえた。そのときマルクの札たばを受けとったが、財布はもとよりポケットにも入れきれぬほどの量であり、カバンの中に入れて持ち帰った。かれはそのときドイツ人らのうらやましげな視線が気になった。成金のほこりよりも、悪いことをして不正の利益を得ているようで、良心がとがめたという。

北は、リッカートやグンドルフのつぎのような講義や演習をとった。一九二一年（大正11）の夏学期から二十二年（大正12）の冬学期にかけて受講したもの。

一九二一年の夏学期（ゾンマーゼメスター）。

講義　哲学入門　　月、火、木、金の夕方五時から六時まで。

演習　論理学　　水の午前十一時から午後一時まで。

注・リッカートの担当か（宮永）。

一九二一年～一九二二年の冬学期（ヴィンターゼメスター）。

講義　ゲーテの『ファースト』　　月、火、木、金の夕方五時から六時まで。

ヘーゲルの論理学　　水の午前十一時から午後一時まで。

注・グンドルフの担当か。

講義　科学、芸術、宗教における感想的な生活哲学（世界観のおしえ）　　月、火、木、金の夕方五時から六時まで。

演習　ドイツの神秘家の著作に関連しての宗教哲学　　水の午前十一時から午後一時まで。

注・リッカートの担当か。

注・Julika Wilbert 記 Der Philosoph und Politiker Kita Reikichi (1885-1961) を参照し、手をくわえた。
Japanische Studenten in Heidelberg, Archiv und Museum der Universität Heidelberg, Schriften 19 所収、herausgegeben von Werner Moritz, 2013

なお北は、リッカートの自宅におけるゼミナールで、二度ばかり研究発表をおこなった（時期は不明）。

演題　ヘーゲルの「概念論」について……北はヘーゲルとヘルマン・コーエン（一八四二～一九一八、カント哲学を論理主義として把握するといった新しい解釈方法の開拓者）との意外な一致点を指摘した。
ヴィンデルバンドの事実判断と価値判断の区別は、ヘーゲルから来ていること――クーノー・フィッシャーは、ヘーゲルの判断論の四分法を攻撃しているが、かれはヘーゲルの事実判断と価値判断のちがいがわからなかったと、北は主張した。

北のこのような意見は、エルンスト・カッシラー（一八七四～一九四五、ドイツの哲学者、当時ハンブルク大教授、のちアメリカに亡命。近代哲学と科学における認識問題を研究した。思性の構造、象徴形式の哲学を探求した。概念の認識は具体的形式において受容せねばならぬと主張した）の『認識の諸問題』（一九〇六～一三）のある一節からヒントをえたものであった。
北によると、この発表に要した時間は三ヵ月、いままでにない努力をしたという。内容についてのリッカートの講評は、ヘーゲルの論理中のもっともむずかしい個所だから、多くの参考書をあさった労を多とした。が、ドイツ語の発音のまずさを指摘された。

演題　日本の神秘主義について（禅との関わりで）……ドイツ人の観るところ、日本人というのは政治がたくみであり、好戦的であり、じっさい的な民族である。だから日本人は、神秘主義に染っていないはずであるといった先入見をドイ

ツ人はもっていたので、この演題そのものがかれらの興味をひき、ゼミ生以外の女子学生も傍聴した。

話の中心は、観照的な宗教が、じっさいの現実生活においてどのような意義をもつのか――禅でいう悟（さとり）（心のまよいが解け、真理を会得すること）と行（ぎょう）（宗教上のきめられた行為）との関係――リッカートからいえば、未解決の観照（対象の本質を客観的かつ冷静にみつめること）と活動との問題であった。

北は草案のドイツ文をヘリンゲルに訂正してもらい、また別人から、発表の前夜、発音を直してもらった。東洋人による研究発表のせいか、大目にみてもらえたようで、ドイツの聴衆は床を足でたたいて祝意を表してくれた。が、三木　清の眼には、北の発表は、大道芸人（だいどう）の大みえ（大道でみせる大げさな芝居）のように写ったようである（加藤将之著『随筆　ハイデルベルクの神話』短歌新聞社、昭和47・12、一五四頁）。

北によると、日本留学生が、「ハイデルベルクに流れ込んだ」のは、一九二二年（大正12）の四月からだという。

石原　謙や大峡秀栄、近藤博士（金沢医大）などはすでにこの地で住んでいたが、やがて大内兵衛につづいて、森　五郎（東大の学生）

三木　清（岩波書店の派遣留学生）　　能代　某（『日本新聞』経済部長）

山下　某（日本大学）　　藤田敬三（彦根高商教授）

増田慈良（ますだじりょう）（真言宗僧侶、初期インド仏教の研究家、大正大学）

大正大学教授時代の
増田慈良

などがやって来た。

北、石原、大峡ら三人は、ヘリンゲルにたのんでゲーテやカントの講義をしてもらったが、のちに大峡の下宿に場所を移してやってもらうころには、三木、山下、増田、藤田、森、能代らも参加するようになった。しかし、北の下宿では、ヘリンゲルによる別途の研究会がおこなわれ、それには大峡やウィンクラー（不詳）のほか、三、四人のドイツ女性が出席した。

一九二二年（大正12）十月――北はハイデルベルクを去ることになり、その送別会が一流ホテル「ヴィクトリア」（駅にちかいレオポルド街六番地。ベランダと庭園がある――ベディカー、The Rhine, 1911）で開かれた。この学都をはなれるとき、大勢のドイツ人や日本人が駅まで見送った。北の下宿先の夫人とその姪たちは、ハンブルクまで北に同行し、この港町で別れをおしんだ。……

大日本主義、アジア主義をとなえた北は、帰国後『日本新聞』（大正14）、哲学雑誌『学苑』（昭和2）、雑誌『祖国』（昭和3）を創刊、主宰した。この間、帝国音楽学校校長、大正大学教授をつとめた。のち多摩美術大学を創設した（昭和10）。その後、衆院議員（昭和11）に当選、戦後は自由民主党議員として活躍した。

じゃがいもを買い求め，ベルリンに帰る市民

北の親友であった大峡秀栄（一八八三～一九五一）は、山形県のひとである。東大の文科大学を出たのち、土浦中学の英語教師となった。あとから同校に赴任してきた北とおなじ下宿に住み、兄弟とおなじに親んだ。大峡はのちに成蹊高等学校の教授となり、一九二一年（大正10）十二月ハイデルベルクにやってきた。大峡はあとからやって来た北と、十三、四年ぶりで再会した。両人は下宿は別々であったが、夕食はうまい料理を出してくれる北の下宿でとった。信仰は禅宗であった。

いつもポケットにチョコレートを用意し、近所の子供たちにそれをあたえた。あるとき、かれは北に提案した。生活上の快をむさぼらず、その一部を周囲のこまっているドイツ人にわけ与えようではないか、と。その後、苦境にある家族の家計をたすけ、一片の肉も主婦と子供たちと分けあった。

大峡と北は、週に一、二度、ドイツ人と夜会をもよおした。そのとき大学の二、三の私講師、下宿先の二人の主婦、彼女らの女友だちが二、三人あつまった。その集会は、生活苦にあえぐドイツ人には大きな慰安であり、大峡らにとってはドイツ語会話をまなぶよい機会であった。

大峡はかれらから見れば異教徒であったが、キリスト教徒のような人性をもち、他人の幸福や利益を行為の目的とす人であったらしい。かれは留学中に『禅――日本における生ける仏教』Zen der lebendige Buddhismus in Japan をドイツ語でかいて出版した。帰国後、昭和十一年（一九三九）まで成蹊高校につとめ退職した。その後、日暮里駅ちかくに禅道場「拓木寮（たくぼくりょう）」を創設し、昭和二十一年（一九四六）八月十六日亡くなった。

享年六十三。

注・北　昤吉著『哲学行脚』新潮社、大正15・5、西山松之助（一九一二～?、東京教育大学名誉教授）の記事「めぐりあい　大峡秀栄先生」『毎日新聞』昭和56・7・29付を参照。

鈴木宗忠（むねただ）（一八八一～一九六三）は、愛知県のひとである。明治から昭和期の宗教学者、哲学者である。明治四十年（一九〇七）東京帝大文科大学哲学科において宗教学（大乗仏教）を専攻した。大正二年（一九一三）郷里の臨済宗妙心寺派東観音寺の住職となった。大正十三年（一九二四）東北帝大教授。のち立正大学（昭和19）、駒沢大学（昭和27）、日本大学（昭和30）の教授を歴任した。宗教関係の多くの著作がある。三木とはじめてどこで会ったのか不明。

阿部次郎（一八八三～一九五九）は、山形県のひとである。大正・昭和期の哲学者である。一高をへて東大文科大学哲学科にまなんだ。『三太郎の日記』（大正3）でその名はひろく知られた。かれは生前、慶大・日本女子大・東北大で教鞭をとったが、東北大に着任するまえの大正十年（一九二一）十二月、文部省在学研究員として美学研究のため、ドイツへの留学を命ぜられ、帰国後東北帝大教授に就任した。

大正十一年（一九二二）五月十一日――かれは門司から箱根丸にのり、欧州留学の途にのぼり、六月二十日マルセーユに到着した。

上陸後、この港町で一泊し、その後リヨンをへてパリに出、この市で二週間ほどすごした。その間にオペラをみたり、ルーブル美術館などを見学して時をすごした。

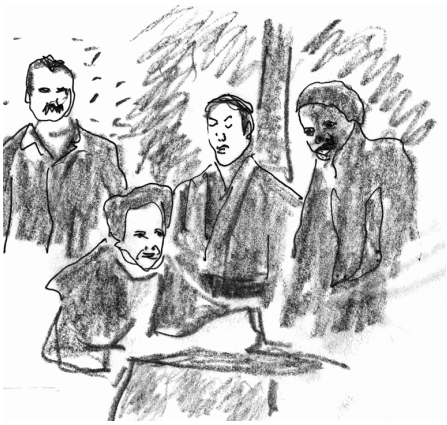
ある夜、オペラ「サン・セバスチァンの死」（ダヌンツィヨ作）を観、芝居がはねて夜十二時ごろ、広場にでたら、肩をたたく者がいた。ふりかえると女であった。女は笑いつつ去っていったが、それは〝夜の女〟のようだった。第一次大戦後のヨーロッパには、その種の女性が多くみられ、のちにベルリンにおいて、こんどかれは〝町の女〟につかまった。

阿部は七月上旬にベルリンに着くと、一ヵ月ほどノイエバイロイド街二番地の下宿に滞在し、戦後急転直下びんぼうになったドイツ人とその社会や文化にふれた。が、やがていろいろな理由からベルリンがいやになり、汽車で十二時間ほどの所にあるハイデルベルクに移動した。

ドイツに入国してほどなく、故国からの手紙がきていないかたしかめるために、日本大使館を訪ねようとしたとき、道にまごつきもたもたした。

そのときむかし横浜にいたというドイツ人が、日本の大使館はこちらだといって案内してくれた。別れぎわに、貧しくて妻子をやしなうことができぬから、いくらかめぐんでくれないか、というので、五マルクあたえた。

七月七日、日本大使館のY氏（矢野正雄――、東京帝大法科大学を卒業後、陸軍省主計課に入省し、おもに赴任先の情報収集につとめた）宅に招かれ、そこで二、三の一高仲間と会った。十二時ちかくまで昔ばなしは尽きなかった。阿部は深夜の夜道をあるいて下宿に帰るとき、ギッテンベルクの広場で〝夜の女〟につかまった。女はかれに腕を組みかけてきた。そのとき、相手の女性と、つぎのようなやりとりをした。



阿部が下宿したシュヴァルツ一家の人々（ハイデルベルク）。

女（甘い声で）　あなたは女がこわいんですか？

阿部（大げさに微笑しながら）　ええ、ぼくはひじょうに女がこわいんです。

女　わたしはいい家（うち）を知っています。ホテルではない……。あなた、わたしといっしょにそこへいらっしゃらない？

阿部　いや、いや。

女　あなたは「いや、いや」とおっしゃる。しかし「ええ、ええ」の方が、ずっといいことですよ。

阿部　ええ。

女　わたしといっしょにいらっしゃる？

阿部　いや（行かない）！

するとその女は、あきらめたのか、かれの腕をはなすと去っていった（「遊欧雑記　独逸の巻」）。

また阿部はベルリンのノイエバイロイト街二番地の下宿（ジークフリード未亡人宅）にいたとき、Gというブロンドの髪をした美人の女中と親しくなった。阿部がベルリンに来て四日目――七月八日の朝のことである。家主（学士夫人（フラウドクトル））と小さな娘は、外出していた。阿部がこの家の奥にあるトイレへ行ったとき、台所で働いていたGから呼びとめられた。

G　Wollen Sie Milch haben?（ミルクいりませんか）

阿部は、このドイツ語を聞くと、なぜ女中はミルクのことをいうのか、真意がわからなかった。そこで Milch? と問い返すと、それが Milch でなく mich（私）であることがわかった。つまり彼女は「わたしが欲しいか」と尋ねたのである。

Gは金持になりたい。金持で善良なあなたのような人と結婚したい。日本へもいきたい。しかし、あなたは婚約者がいるんでしょう、といった。阿部は、日本へ行きたければ、連れて行こうかというと、彼女は Ha, ha, ha! と高笑いした（「伯林の夏」）。

十三日に阿部は、一週間分の部屋代その他

計一七八〇マルク

の支払いに、二〇〇〇マルクをGにわたし、家主につりはいらぬ、といって来いと命じた。このとき彼女は「あなたは侯爵か」と聞いた。「そうじゃない」と答えると、「それではつりをもって来ます」といった。阿部はつり銭で新しいスリッパー、菓子などをもとめ、その家に贈った。

ベルリンの物価は徐々にあがっていった。Gと阿部との関係は親密の度をふかめていった。かれはベルリンを去るときに、Gに二〇〇〇マルク相当の金をあたえたが、それはせいぜい邦貨にして十円にすぎなかった。妻子もちの阿部がベルリンで抱いた苦悩は、欲望が充たされぬことから来る緊張と性のまひ的な飢餓であり、女に惑溺したときの堕落であった。教養のひくいGとねんごろになったとき、そこから得られるものはあまりにも少なく、かれはそれでは生きていけなかった。Gがかれに与えられるものは、せいぜいその美貌と肉体だけであった。かれは女から逃げるような形でベルリンをあとにせねばならなかった。

ハイデルベルクにいた石原　謙にしばらく滞在できる下宿を捜してほしい旨の手紙が送ったのは八月上旬のことであった。石原は前年（一九二一）の夏――休養のためしばらく住んだシュヴァルツ夫人の邸宅（古城公園の上手のヴォルフスブルンネン道に位置）がよいと考え、同夫人と会

ってたのんだら快諾をえたので、折り返しその家の大体をかいて阿部のもとへ送った。

八月八日の夕方七時半ごろ――阿部は一高のときの旧友・林　久男をともなってハイデルベルクにやってきた。石原は両人と予定しておいたグランドホテル（ローアバッヒャー街六番地にある一流ホテル）へ行こうとしたら――

矢野正雄（スウェーデンへ転任するまえのベルリンの日本大使館書記官）夫妻
吹田順助（一八八三～一九六三、明治から昭和期のドイツ文学者。山形高教授をへて、後年一ツ橋、中央大学教授）

らといっしょになり、図らずも五人の一高同級生が二十年ぶりで異郷で再会した。そこで一行六名は、駅ちかくの「レストラント・ライヒスポスト」で夕食をとったのち、灯火のくらい街をぶらつき、新しい橋まで来ると、そのほとりからハイリゲン山のすがたを仰ぎながら、心おきなく日本語で語りあった（阿部）。

阿部は八月十日から新居に移った（石原　謙「ハイデルベルクの『山腹の家』」）。

かれは講義をうけるのに先立って、履歴書をかき、それを大学に提出していた。

Lebenslauf.

Ich bin am 27 sten August 1883 zu Yamagata (Japan) geboren worden,

1889-1896 besuchte ich die Elementarschule zu Yamagata,

1896-1901 die Mittelschule (Gymnasium) zu Yamagata,

1901-1904 habe ich in der Ersten Hochschule (humanistischem Ober gymnasium) zu Tokyo die Vorbereitung für die philosophische Fakultät in der Universität bekommen,

1904-1907 habe ich in der Kaiserlichen Universität zu Tokyo Philosophie studert, und am Schlusse der Periode das Reifezeugnis (Doctor[ママ] philosophie) erhalten,

1920-1922 bin ich Professor an der Keio Universität gewesen,

Im März 1922 bin ich von des Regierung zum Studium nach Europe gesandt worden.

Jiro Abe

注・ここに在ドイツ日本大使館の㊞がある。

注・ここに大学側の受領㊞がある。

ハイデルベルク大学の文書館・博物館蔵。

原文は筆記体。

この略歴は、生年月日にはじまり、小・中学校を出たのち、一高、東大に入学したことを伝えている。一高に入ったのは、大学の哲学科に入るための準備のためという。ついで東京帝大にまなび、博士号を得て卒業したのち、慶応大の教授になったといっている。そして一九二二年三月、政府の命によりヨーロッパ留学の途にのぼったと記している。

阿部は不精な人間であった。毎日、下宿において〝どてら〟（綿を入れた防寒用の和服）を着て本をよんでいた。が、十一月二十日ついに山を

おりると、大学の会計課にいき、三つの講義の聴講料を払った。それは一九二二年〜二三年の冬学期（ヴィンターゼメスター）に出席するための手続きであった。

かれは人から講義についての情報をえていたが、どの講義もあまり気のりがしなかった。服を着がえて出かけるのがおっくうであったからである。しかし、ドイツの大学の講義とはどんなものか、その様子を知りたい気はあった。

かれが登録したのは——

講義　リッカートの「カントからニーチェまで」　教場は二階の奥の小教室か。月、火、木、金の夕方五時から六時まで。
講義　フリードリヒ・グンドルフの「十九世紀ドイツ文学史」　教場は三階の奥の大教室。
講義　カール・ノイマンの「デューラーとその時代」

などであったと考えられる。

夕方の五時きっかりに講義室に電灯がつくと、聴講生はそこへつぎつぎ入っていった。そこはけっして大きな部屋ではなく、東大文科の二十番教室くらいの大きさであった。かってヘーゲルが講義したのもその部屋であった。白い壁はよごれて黒ずんでおり、下半分はグレー色であった。横長の机のうえには、学生がナイフで刻んだじぶんの名や落書きがみられた。授業をうける者は、年齢も国籍も雑多であり、寝るときかぶる帽子（ナッハト・ミュッツェ）のようなものをかぶったおじいさんがおれば、けっして美人とはいえぬ女性たち、ユダヤ人の利口そうな学生、二、三の日本留学生もいた。

そこへせかせかと白髪の老人が入ってきて、教壇にあがると、椅子にすわった。これこそリッカート教授であった。阿部はリッカートはやせた、落ちつきのある人であろうと想像していたが、実物はそうではなく、皮ふのたるんだ、ぜい肉のついているような、すこしぶかぶかな感じがする老人であった。

リッカートはどのように講義したのか。それは張りや落ちつきのない調子で、草稿をよみ上げるものであった。朗読のとき、神経質に手をうごかし、講義に濃淡をつけようとする。が、受講者の緊張はそう長くはもたない。例のナイトキャップをかぶった老人は、居ねむりをはじめている。ユダヤ人の学生は熱心に教壇をみあげている。

ときどきリッカートは、フリードリヒ・パウルゼン（一八四六～一九〇八、ドイツの哲学者・倫理学者・教育学者。ベルリン大教授）やコーヘンの名を引き、じぶんとは違った解釈をしていることを指摘する。そのとき、誤解（ミスフェアシュテントニス）、ということばを多用する。講義がおわるころ、このつぎの講義において大事なことをいうと予告する。

一時間の授業を聞いたあとのタバコはうまかったが、これから山をのぼって下宿にかえる阿部の頭のなかは、ざわついており、いらだっていた。帰宅すると、老夫人がリッカートの講義はどうでした、と聞いたので、大したことはありませんと答えた。するとヴィンデルバルト党の彼女は、それはうれしい（エス・フロイト・ミッヒ）といった。そのあと夫人と嫁にいった娘が、口をそろえて、ヴィンデルバルトが生きていたら、あなたはきっと毎日かれの講義を聴きに行くことでしょうといった。が、阿部は内心では、行くかどうかわかりゃしないと思った。

阿部はリッカートの講義を一度聴いただけで、その後出席することをやめた。リッカートは講義そのものより、その書物のほうがずっとすぐれていた。講義に出まいと決心したのは、かれの哲学の学問的価値を否定したからではなく、そのときの気分の問題によるものだった。講義に出るより、家にいて本をよんだほうがましだと思った。

その後二週間、阿部は家に閉じこもって暮らした。老夫人はかれが運動もしないで家に閉じこもっていることを心配した。洋服に着がえず、キモノ（どてら）のまゝでよいから庭にでて、ぶらつくようにいった。道を通る者も、キモノすがたの東洋人をみて、カトリックの坊さんが散歩しているぐらいにしか思わないでしょうといった。

十月の末ごろ、三日つづけて雪がふった。晴れた日でも中空に雪がちらつくことがあった。冬の到来である。

十二月四日の午後――阿部は早目に昼食をすませると、山をおりた。午後二時から始まるグンドルフの講義を聴くためである。教場はリッカートの教室の倍くらいの大きさであり、ほとんど満席であった。聴講者の$\frac{1}{3}$は女性であった。

やがて卒然とし、長身のヤセぎすの中年男が部屋に入ってきて教壇に上ると、しゃべり始めた。蒼白い顔に、黒いまゆげが付いている点は、いかにもユダヤ人の顔のようでもあった。ことばは明晰であり、はっきりとアクセントがついていた。それがおおげさに感じられるときもあった。この人物からうける印象は、秀才にちがいないといったもので、気取り屋と大人物がいっしょになったような感じであった。

ロマン主義の思想家ジョゼフ・フォン・ゲレス（一七七六～一八四八、ドイツの作家。「ドイツ民話集」「一八〇八」を発表。政治新聞「ライン・メルクール」の主筆。のちミュンヘン大教授）にふれたが、リッカートとちがって草稿をはなれた講義ぶりであり、阿部はかれの講義はおも

留学中の成瀬無極

しろいと思った。著作とは別に、何か心にじかに伝わるものがあるような気がした。阿部は一度きりでなく、また聴きに来ようとおもった。

その後、阿部はグンドルフやノイマンの講義に出席することを続けたかどうか定かでない。おそらくやめたものであろう。かれは下宿にこもり、どてらを着、炉ばたで好きな本をよんですごしたものであろう。おおみそかの夜は、下宿の人びとと燗をしたブドウ酒をのみながら行く年を送り、十二時に教会の鐘の音――花火の打ちあがる音を聞いて新年を迎えた。年し越しの風景は、日本とおなじであった。……

成瀬無極（一八八四～一九五八）は、東京のひとである。本名を成瀬　清といった。大正から昭和期にかけてのドイツ文学者、劇作家であった。東大を出たのち三高教授となり、大正九年（一九二〇）京大教授に就任した。翌十年秋ドイツに留学し、十二年（一九二三）の冬帰国した。著訳書はドイツ近代文学関係のものが多い。

外遊二年間、かれはアメリカ、イギリス、フランス、ドイツと居住地を転々としたが、いちばん長くくらしたのはドイツのベルリンであった。かれは一九二二年から翌二三年にかけて、ベルリン大学の夏と冬の二学期を受講したようである。かれはいつハイデルベルクにやって来たのか定かでないが、一九二三年（大正12）春には当地にやって来たようである。ハイデルベルクでは、一学期を送ったという（『夢作る人』内外出版社、大正13・7、「緒言」を参照）。

大学の学籍簿には、一九二三年四月三十日に登記したことが記されている（Fabienne Laun, Martina Springweiler 記 Der Germanist Naruse Mukyoku (Kiyoshi) 1885-1958, Japanische Studenten in Heidelberg, p.69）。下宿は旧市街のヴレデプラッツ（現・フリードリヒ・エバートプラッツ）四番地のフォークト博士夫人方であった。かれはいつどこで三木と会ったものか明らかでない。

天野貞祐（一八八四～一九八〇）は、神奈川県のひとである。一高をへて京都帝大哲学科にまなび、主としてカントを専攻した。大正三年（一九一四）七高に赴任し、八年（一九一九）学習院教授に就任した。一九二三年（大正12）の春から翌二四（大正13）年夏までハイデルベルクですごした。

かれが聴講したのは、――

講義　エルンスト・ホフマン教授（一八八〇～一九五二）　近世哲学史　午前八時～十時まで。

注・これは一般公開用の講義か、元気はつらつとした女子学生らの中に、野菜カゴをもった主婦、哲学小辞典をもった老人のすがたもあったという（「ハイデルベルクの思い出」）。

講義　オイゲン・ヘリゲル私講師（一八八四～一九五五）

注・哲学概説（客観主義の一例としてプラトン哲学をあげ、イデア説を講じたもの）

演習　ハインリヒ・リッカート教授（一八六三～一九三六）　自宅における演習

などであった。

藤田敬三（一八九四～一九八五）は、香川県のひとである。昭和期の経済学者である。専門は工業政策、中小企業経営論である。大正十年（一九二一）京都帝大経済学部を卒業後、十三年（一九二四）彦根高商教授となった。このころ文部省在外研究員としてハイデルベルクにやって来たものであろう。その後の経歴は、大阪商大助教授（昭和4）、同大学教授（昭和8）、大阪市大商学部長（昭和24）、大阪経済大学長（昭和35）、のち同大学理事長。

多くの著書、編著がある。

黒正（こくしょ）巖（いわお）（一八九五～一九四七）は、岡山県のひとである。昭和期の農業史家。農村社会史学者である。大正九年（一九二〇）京都帝大経済学部を卒業後、大学院に進み、十一年（一九二二）講師となり、十五年（一九二六）教授に就任し、六高校長をかねた。ハイデルベルクにやって来たのは、ドイツ留学中のことか。のち大阪経済大学長になった。多くの著訳書があるが、実証主義的な『百姓一揆の研究』（岩波書店、昭和三

年）の著者として、その名は知られている。

小尾範治（一八八五～一九六四）は、山梨県のひとである。明治から昭和期の行政官である。東京帝大文科大学哲学科を卒業後、文部省に入り、学務・社会教育畑をあるいた。スピノザの研究家でもある。

かれが文部省の在学研究員として、ベルリンからハイデルベルクにやって来たのは、一九二二年（大正11）の九月上旬のことであった。すでにこの学都の山々は、すっかり黄葉していた。かれはネッカー川の水と山にかこまれたこの静かな町が気に入った。下宿先の住所は不明だが、電車の音さえ聞こえぬ町の片すみというから、旧市街のはずれか。そこにある老女ひとりの家に寄寓した。ときどき聞えてくるのは、近くにある教会の大時計の鐘の音であった。

小尾がはじめ知っている日本人といえば、阿部次郎と三木　清ぐらいであった。この二人はすっかり落ちつき、読書にひたっていた。小尾は近々大学の講義がはじまると聞いたので、「きりつめた聴講をしよう」とおもった。かれが聴講したと考えられるのは、ハインリヒ・リッカート教授の――

講義　「カントよりニーチェまで」（週四時間）
演習　「歴史と生物学の方法論」　マックス・ヴェーバーの学説を顧慮したもの。

などであった。ほかに大峡や北の下宿でひらかれたヘリゲルの読書会にも顔をだし、ヨハン・クリスティアン・フリードリヒ・ヘルダーリン（一七七〇～一八四三、ドイツの詩人）の『ヒュペリオン――ギリシャの隠者』（哲学小説）などをよんでもらったようだ。

九鬼周三（一八八八～一九四一）は、東京のひとである。男爵九鬼隆一の四男である。一高、東大をへて、大正十一年（一九二二）から昭和四年（一九二九）まで、フランス・ドイツに留学し、京大文学部講師（昭和4）、京大助教授（昭和8）をへて教授（昭和10）に就任した。かれは

実存哲学的な立場から時間論、偶然論を論じた。

九鬼はいつハイデルベルクにやって来たのか。その時期は、一九二二年（大正11）の初夏ごろではなかろうか。かれは妻をともなっていた。夫妻は個人宅に下宿することなく、街の一流ホテルである「グラントテル」でくらした。阿部次郎は週に一回、山をおりると、九鬼夫婦のところに、入湯に行った。

とりあえず九鬼は、一九二二年から二三年の夏学期から冬学期に、つぎのような講義と演習をとった。

夏学期　講義＊　ハインリヒ・リッカート教授　認識論および形而上学の入門。
〃　＊＊　芸術哲学。
演習＊＊＊　直観の概念。
講義　ハインリヒ・リッカート教授　カントよりニーチェまで――現代の問題における歴史的入門。

冬学期　演習　オイゲン・ヘリゲル私講師　カントの先験的哲学における感情移入。

＊　月、火――午後五～六時。
＊＊　木、金――午後五～六時。
＊＊＊　水――午前十一時～午後一時。

ほかにリッカート教授に、一対一の講義（Privatissimum（プリヴァティスィムム）――〝二人だけ〟の意のラテン語）をたのみ、カントの『純粋理性批判』をよんでもらった。

九鬼の細君は、品のある美人であり、ドイツ人から日本女性がもつ恥らい、優美さを称賛された。彼女はSという名の若いユダヤ人女性からドイツ語を習っていた。

三木がハイデルベルクにいたのは、一九二二年（大正11）の六月末から、一九二三年（大正12）の十一月中旬（？）までの、約一年半である。

三木によると、かれのハイデルベルク時代は、京都時代の延長であり、あつめた本も論理学や方法論に関するものが多かった。

当時、この学都の哲学を代表していたのは、リッカート教授であった。三木はこの先生に師事し、さらに歴史哲学の研究をふかめたいと思った。ほかに有名教授のヤスパース、ホフマン、グンドルフらの講義に登録し、二、三度授業にでてみたが、なぜかその後出席しなくなった。心変わりの早さもかれの性格の特徴のひとつであろうか。しかし、少人数のゼミナールや読書会、討論会などへの出席はひじょうに熱心であった。

かれがハイデルベルクにいたとき、いちばん勉強したのは、

マックス・ヴェバー（一八六四～一九二〇、ドイツの経済学者・社会学者）

エミール・ラスク（一八七五～一九一五、ドイツの哲学者。新カント派から出発し、価値哲学を基礎に論理学の新体系をつくった）

であったという（「読書遍歴」）。オイゲン・ヘリゲルは、ラスクの弟子であり、その著作集をあんだ人である。

三木はリッカートのゼミに出席をつづけ、一九二二年（大正11）の冬学期に「個別的因果性の論理」を報告し、翌二十三年（大正12）の夏学期に「真理の確実性」を、またヘリゲルのゼミでは「論理学における客観主義」を報告した。さらにリッカートの紹介によって、「日本の哲学に対するリッカートの意義」Rikerts Bedeutung für die japanische Philosophie を『フランクフルター・ツァイトゥング』紙（一九二三・五・二七付朝刊）に寄稿した。

三木はリッカートの自宅におけるゼミナールで、左記のような若い博士連中（ドクトーレン）と知りあいになり、その演習に出たり、個人教授をうけたり、本をよんでもらった。

演習　　オイゲン・ヘリゲル（一八八四～一九五五）私講師……「むずかしい論理学上の問題―ボルツァーノ、ロッツェ、ヴィンデルバントなどを参照して」。

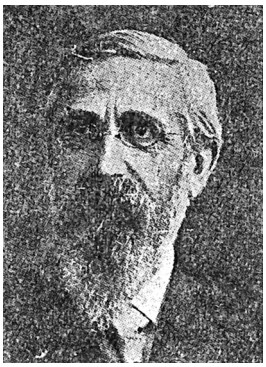
〃　　〃　　カントの『プロレゴメナ』。

読書会　ヘルダーリンの『ヒュペリオン』。
演習　ヘルマン・グロックナー（一八九六～一九七九）……ヘーゲルの『精神現象学』。（於大峡秀栄の下宿）
読書会　ロベルト・シンチンガー（一八九八～一九八八）……プラトンのもの。用書名は不明。
講義　カール・マンハイム（一八九三～一九四七、……同人からは、マックス・シェーラーの知識社会学の話を森といっしょにきいた。
　ハンガリー生れの社会学者、のちナチスに追放され、ロンドン大に移る）
〃　ロベルト・ヴィンクラー（一八九四～一九……ヴィンクラーは、ゲオルグ・ヴォッバーミン教授（一八六九～一九四三、ドイツの神学者・宗教心理学者）の弟子という。『現象学と宗教』という論文で、私講師（？）の地位をえたという（「読書遍歴」）。用書は不明。
　八三、プロテスタントの牧師、宗教哲学者。のちハイデルベルク大教授［一九二八］）

三　マールブルク

かくして一年半ちかく、ハイデルベルクで哲学修業した三木は、この学都で知りあった同胞と別れてマールブルク（ドイツ中部、フランクフルト＝アム＝マインの北九六キロに位置する大学都市）に移った。移動した時期は、一九二三年（大正12）の秋ごろか。

かれはマールブルクに移るまえに、夏の中旬、一週間ほど予備調査をかねてこの町に滞在し、冬の学期にそなえ、教授連とも会った。かれの目的は、マールブルク学派のパウル・ナトルプ（一八五四～一九二四）やニコライ・ハルトマン（一八八二～一九五〇）について学ぶためであった。

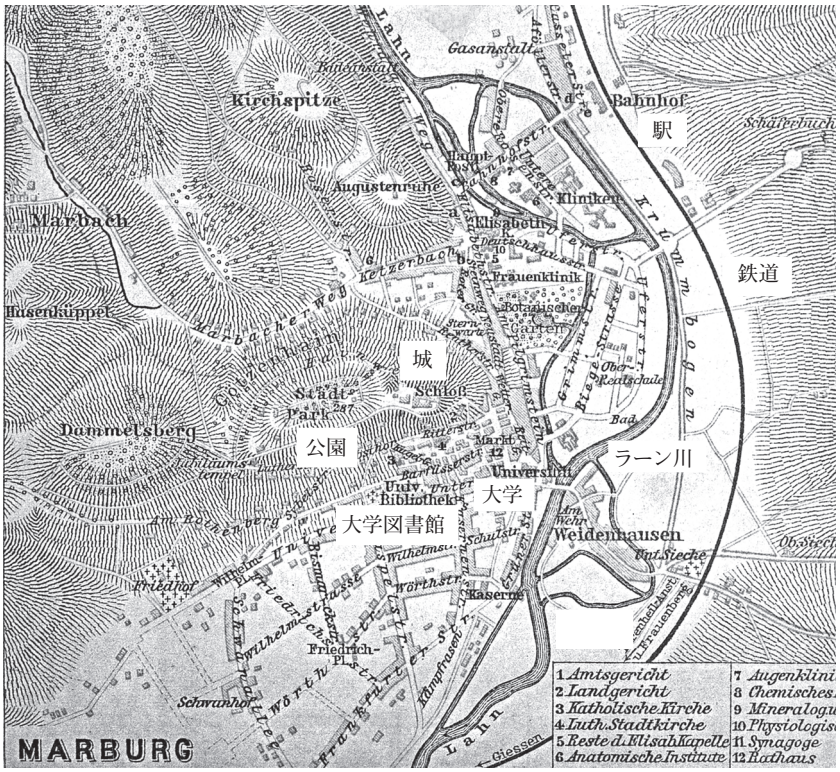

パウル・ナトルプ

ハルトマンは軍服を着てすがたをみせた（岩波茂雄宛書簡――一九二三・五・一六付）。三木は当初、この小さな大学町に移っても、日本人はいないだろう。たぶん一人で暮らさねばならぬだろう、と思っていた。が、この町にも日本人はいたのである。

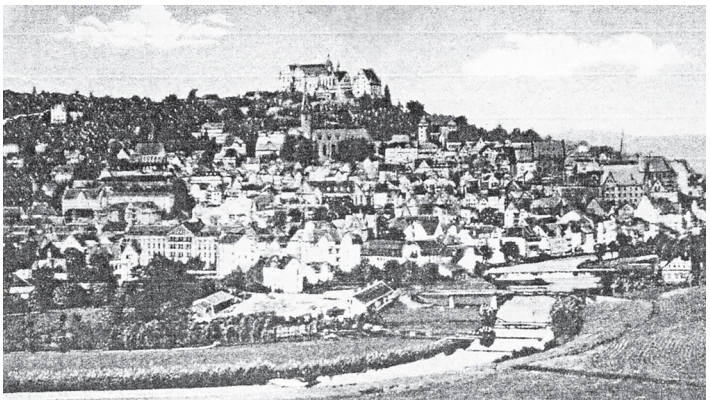
マールブルクは、どのような町なのか。

この町の地勢、街のたたずまいは、ハイデルベルクと似たところがあった。が、この町があまりにも田舎なのにおどろいた。見るべきもの、聴くべきものは少しもなく、本屋に行ってもろくに本がなかっ

た。静けさだけが取りえの町であり、落着いて勉強できるとおもった。ドイツ中部の州ヘッセンを東から西へ流れているのがラーン川（ライン川の支流）。そのラーン川の谷あいに位置しているのがマールブルクである。その起源は古く、十二世紀にさかのぼる。ゆるやかに流れるラーン川の右岸から、地勢は半円を置いたようにじょじょに高くなる。山地を登りつめた頂上にあるのが、ヘッセン侯の居城（シュロス）（12C～15Cの建造）である。城は町全体を俯瞰している。



マールブルクの地図
1910年代のもの。



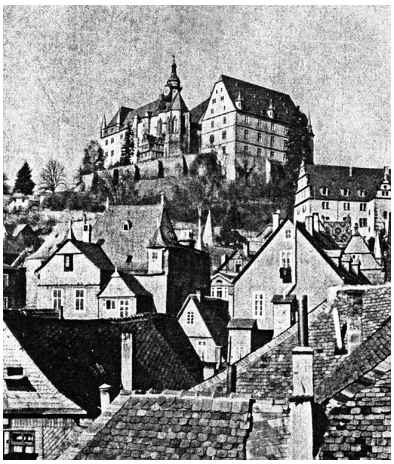
マールブルクの町とラーン川

マールブルクは、この城と周囲の山を中心につくられた町である。ハイデルベルクと同じように、町は古い街、新しい街からなる。旧市街は城を中心として、だらだらとした傾斜地にある。街区は規制的に整然とできたものではなく、家はあちこちに点々とある。どの家も赤い屋根をもつ木組みのふるい家屋である。街は山地にあるから、広い道路はなく、小路（ガッセ）や横町が多いのもこの町の特徴である。マールブルクは、人口が三万にも満たない、小さい〝山の町〟にすぎないが、町としての機能をじゅうぶん果たす施設を備えていた。

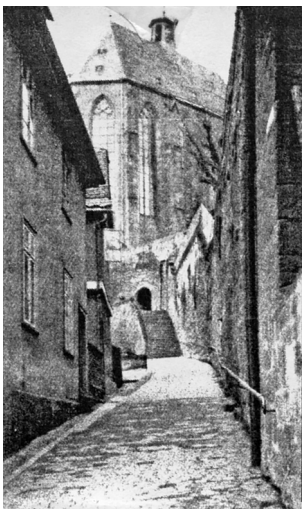
駅舎は二つある。市電が街なかを走っている。町には城・教会・郵便局・庁舎・税務署・裁判所・刑務所・兵営などがある。市営の電気・水道・ガス会社があり、社会的施設としては病院・孤児院・感化院・養老院・職業紹介所・各種の学校などが設置されている。しかし、マールブルクを代表するものは、なんといっても城と大学である。大学とそれに付属する図書館、研究所、病院などであり、いずれも街中に分散してある。

ヘッセン侯フィリップは、十五世紀中葉に、ドイツで最初のプロテスタントの大学――マールブルク大を創設した。この大学はのちに新カント学派――マールブルク学派（コーエン、ナトルプ、カッシーラなど）によって世間に知られるようになった。町の人口や学生数の推移をみると、つぎのようになる。

一九〇四年（明治37）……人口は約一万七五〇〇。学生数は約一、一〇〇人。
一九二三年（大正12）……人口は約二万三五〇〇。学生数は約二千数百名。



マールブルクの城と家なみ。



マールブルクの小路

注・三木がいたころの数字。

三木がマールブルクに来たころ、一五〇名ほどの教師が約二千数百名の学生の教育をになっていた。

三木はこの大学町で、新たにつぎのような日本留学生と知りあいになったといい、つぎの五名の名前だけをあげている（「読書遍歴」）。

九大教授時代の四宮兼之

注・（　）内および説明文は引用者による。

鈴木　弘（一八九〇～一九五六、明治から昭和期の僧侶）……大谷大学の派遣留学生。『聖なるもの』（一九一七年）の著書で有名になったルドルフ・オット教授（一八六九～一九三七、プロテスタント神学者）について学ぶことを目標にしていた。

守屋貫教（一八八〇～一九四二、僧侶）……立正大学の派遣留学生。東京帝大文科大学卒（明治39）。ルドルフ・オット教授について学ぶことを目標にしていた。のち立正大学長。

四宮兼之（一八八四～一九四五、明治から昭和期の哲学者）……愛知県名古屋のひとである。東京帝大文科大学卒（明治44）。カント以降のドイツ哲学を研究。コーエン研究家。マールブルクでは、ハルトマン教授を目標とした。留学後、九州帝大教授をへて満州建国大教授。昭和二十一年（一九四六）骨となって妻子とともに帰国。

長屋喜一（一八九五～一九九三、昭和期の倫理学者）……岐阜のひとである。十八歳まで農業をやり、その後東京帝大文科大学で倫理学を専攻した。マールブルクでは、ニコライ・ハルトマン教授を目標とした。大正十一年から四年間、ベルリン大、マールブルク大で哲学をまなぶ。マールブルクでオット教授の導きで禅と出会う。帰国後、東京高師で哲学・倫理学をおしえながら座禅につとめ、のち東京文理科大、専修大学教授となる。

山下徳治（一八九二～一九六五、教育者。教育運動家）……鹿児島のひとである。鹿児島師範を卒業後（大正2）、西田小学校につとめ、大正十一年（一九二二）ペスタロッチ研究のためドイツに留学し、マールブルクにやってきた。マールブルクでは、ナトルプやイエンシュ教授を目標とした。帰国後、新興教育研究所を創設したり（昭和5）、『教育』（岩波書店）の編集長となった。

しかし、守屋貫教の「滞欧雑感――其一、マールブルクの生活」（『法華』所収、大正15・12）によると、そのころすでに計七名の日本人がおり、そこへ守屋と三木がやって来て、九名になったという。しかし、守屋は日本留学生全員の名前を明記せず、ローマ字の頭文字だけでよんでいる。

四宮兼之→S博士　（守屋の説明文、以下おなじ）九州大学の教授になる人。
長屋喜一→N学士　東大倫理学科の出身で、おちつきのある人。
三木　清→M学士
？　→O学士　ドイツ化学界の権威ガダーマ教授のもとで、薬物化学を研究している人。
？　→K博士
山下徳治→Y君　東京の有名な私立小学校の教師で、教育学を研究するため、ナトルプ教授をしたい、一家三人とこの町に住んでいる。

三木についての記述は、――

その外に若き学士（大学卒業生の称号）が三人居る、その一人は京都から来て居るM学士で、日本哲学界の唯一人者たるN博士（西田幾多郎のこと）門下の高材であり、……

注・ルビおよび（　）内は引用者による。

となっている。

三木によると、そのころマールブルクを目ざしたものは、哲学の方面では、――

ニコライ・ハルトマン教授（一八八二～一九五〇、ドイツの哲学者）……第一次大戦に従軍。フッサールの現象学の影響をうけ、のち独自の客観

的形而上学を樹立した。マールブルクにいたのは、一九二〇～二五年まで。のちケルン、ベルリン、ゲッチンゲンの各大学教授を歴任。

マルティン・ハイデガー私講師（一八八九～一九七六、ドイツの哲学者）……実存哲学の創始者。マールブルクにいたのは、一九二三～二八年まで。その後、フライブルク大教授、同大学長。

宗教学の方面では――

ルドルフ・オット教授（一八六九～一九三七、ドイツのプロテスタント神学者）……シュライエルマハー（一七六八～一八三四、ドイツのプロテスタント神学者）の流れをくみ、宗教を道徳や哲学と異なる次元のものと考えた。モロッコ、インド、日本を旅行し、神秘主義を研究した（一九一一～一二）。マールブルク大教授（一九一七）。

を目標にしていたという（「読書遍歴」）。

三木が目標としたのは、フライブルクからマールブルクに招聘されたハイデガー（一八八九～一九七六）について学ぶためであったというが、三木がマールブルクへの移動を志行した事情に関して疑問を提したのは、ギリシャ哲学研究家・田中美知太郎（一九〇二～一九八五、のち京大教授）であった。田中によると、マールブルクは、マールブルク学派の聖地であったから、三木は第二の勉学の地としてそこを選んだのではないかという。（「第二章　三木　清のこと」『時代と私』［新装版］所収、文藝春秋、昭和59・5）。田中の疑問点を摘記すると、つぎのようになる。

一　当時、まだあまり仕事ぶりについて知られていなかったハイデガーだけを目ざしてマールブルクへ行ったとは考えにくい。

一　リッカートからフッセルのもとへ移っていったハイデガーのことを、三木はうちわの批評やうわさとして、その名を聞き、好奇心をもったのではないか。

一　三木がいうように、アリストテレスを勉強するために、わざわざマールブルクのハイデガーのもとへ行ったというのは、どうみてもおかしい。

三木のマールブルク行の動機として、いくつかの選択肢があった。そのひとつにニコライ・ハルトマンがいた。が、その講義にでてみて，失望し，（森　五郎宛書簡）、代わって未知の人物ハイデガーをえらび、当人に師事することにしたようだ。

三木の研究者によってよく引用される「読書遍歴」（昭和16）は、あとからの回想であり、はじめからハイデガーだけを目ざしてマールブルクへ行ったと書いていることに疑いがあるという（田中「三木清のこと」）。

ハイデガーは三木がマールブルクに移動したころ、この町にやってきた。三木はこの山の町にやって来てほどなく、紹介状なしでかれを訪ねたという。そのころハイデガーは間借りをしていた。

そのとき三木はアリストテレスを勉強したいが、じぶんの興味は日本にいたときから歴史哲学にあるから、この方面の研究をつづけたい。ついてはどんな本をよむのがよいかと尋ねた。すると相手は、アリストテレスを勉強したいそうだが、かれを勉強すること自体が、歴史哲学を勉強することなのだ、といった。そのとき三木にはこの言葉のいみがよくわからなかった。が、のちにかれの講義に出るようになって、初めてその意味がわかった。歴史哲学は解釈学にほかならないのである。解釈学とは何かは、じぶんで古典の解釈にしたがえは、おのずから習得できると思った（三木「ハイデッゲル教授の思ひ出」）。

マールブルク大学

マールブルク大の講義やゼミナールに出席するには、まず大学に転学願書（ハイデルベルクからの）を差しださねばならぬ。そして入学を許可する知らせが来たら、大学へおもむき、書記室で署名する必要がある。が、おそらく三木は冬学期に合わせて登記したものであろう。

マールブルクの三木の下宿だが、かれはこの町に滞在した一年ほどの間（一九二三年［大正12］の秋から翌二四年［大正13］の夏まで）に、下宿を一度かえている。

マールブルクの三木　清の下宿
（ティンメ牧師宅）

第一の下宿……モルトケ街二十一番地。
著書が数冊あるティンメという名の牧師宅。この下宿は、町の南の郊外にあった。近くに野菜畑や牧場があり、また遠くに山をのぞむことができた。のち同人はフランクフルト大学に招聘された。

第二の下宿……シュヴァレ四十一番地。
ベッカー夫人宅。家はラーン川の河畔にあったものか。

注・ハイデガーも同じ通りに住んでいた。この下宿を紹介したのはティンメ牧師であった。

三木が受講したと考えられる教師名・科目名は、つぎのようなものである。

講義（午前七時からはじまる）マルティン・ハイデガー（一八八九～一九七六）……アリストテレスの解釈。
注・アオグスティヌス、トマス・アクィナス、デカルト、カントらのテキストの部分の評釈。

〃　アオグスティヌスの購読。

演習　注・一九二四年の夏学期。
用書はアリストテレスの『自然学』、フッサールの『論理学研究』。

〃

講義　ニコライ・ハルトマン（一八八二～一九五〇）……何の講義なのか不明。認識論か。
注・守屋、鈴木、Kらは、一九二四年（？）の夏学期、ハルトマンの「範ちゅう論（カテゴリーエン）」を聴いている。
注・長尾喜一によるマールブルク大の哲学科講義題目報告（『哲学雑誌』第461号所収）を参照。

演習　用書としてカントの『純粋理性批判』とヘーゲルの『論理学』を用いた。

〃

ほかに読書指導をうけたのは左記の人びとである。

ガダマル博士（不詳）……ハイデカーの紹介により、その家に通いアリストテレスの「形而上学」「ニコマコス倫理学」を読んでもらった。

カール・レーヴィット（ハイデカーの助手）……その家に通い、フッサールの『論理学研究』を講釈してもらった。さらに同人からシュレーゲル、フンボルト、ディルタイ、ニーチェ、キルケゴール、ヤスパース、マックス・シェラーなどへの眼を開かれた。

注・レーヴィットは後年マールブルク大学の講師になったが、ユダヤ人であるというので危険を感じ、来日し東北大で教鞭をとった。が、太平洋戦争がはじまる前に、ロックフェラー財団の援助でアメリカへ渡った。

ティンメ牧師（下宿の主人）……三木がラテン語の辞引をひきながらアオグスティヌスを読んでいるのをみかねて、『告白録』をよんでもらった。

フランス語の女教師（名は不詳）……パリへ出る準備のため、一ヵ月ほど教師宅に通い、フランス語会話をならった。

三木はハイデガーの講義を独創的（オリギネル）でおもしろいと思ったが、ハルトマン教授のそれには失望した。その講義は、人気があったが、三木の眼には、講義ぶりは芝居がかっていて、技巧の多いものであった。ハルトマンは手品師のように、手ぎわよく問題をとりあつかう。しかし、かれの考え方は安易なものであり、かつ深みのないものであった。ヘーゲルの演習では、『論理学』に出てくるいろいろな概念をあっちこっちと動かし、空虚な概念でチェスをやっているような気がした（森　五郎宛書簡、一九二三・一一・二六付）。

三木はハルトマンの講義や演習に感心しなかったが、生活にこまっていた同人のために、ギリシャ哲学に関する小論文を三つ書いてもらい、その三篇を『思想』に斡旋し、三木が訳し、大正十四年（一九二五）三月まで同誌に発表した。

ニコライ・ハルトマン

三木はナトルプのプラトン講義とプラトン演習、言語学者フリードレンダーの演習に出てみたいと思ったが（ハイデガーの解釈学に感化され、言語哲学に興味をもつ）、じっさいこれらの科目をとらなかったようだ。三木は守屋がとっていたラーデ教授（不詳）が月一回ひらく〝学生会（オッフェアーベント）〟に、守屋とともに出席した。それは教授宅に夕方六時か七時ごろ、二、三十人の学生があつまる茶話会であった。人があつまり、落つくと、教授がそのころ呼び物になっている文芸や詩歌の一節を朗読したり、宗教上の事件が報道されると、それについて学生の意見をもとめたりする集いであった。

ヴィルヘルム・ディルタイ

そのあとコーヒーや菓子がでるのだが、こういうときふだんあまりしゃべらぬ者も多弁になる。そうしている間にも夜はふけてゆく。十一時ごろになると、むかし牧師だった教授はかんたんなお祈りをし、夫人のピアノで皆いっしょに讃美歌をうたい、それで散会する。

三木はルドルフ・オット教授の授業をとらなかったが、守屋、四宮らと、よく午後四時のカフェに招待された。そのあとオットは愛犬をともない、日本留学生と邸宅の裏山からラーン川の下流まで散歩した。その間、よく中国や日本の仏教についての質問をした。

三木はフランス文化への憧れから、パリへ移る計画でいたが、マールブルクを去りがたかった。ここでくらした一年間はかれの一生でもっとも静かな、落ちついた時期であった。

年くれにかれは岩波に無心の手紙をだした（12・22付）。物価があがり、個人教授してくれる教師のレッスン代（シュトゥンデ）が値上げになり、少々予算が狂ってきたこと。外国人は大学の月謝だけでも、一学期に八〇円から九〇円とられることを理由としている。そこで大変恐縮ですが、今回は半年分として、一四〇〇円送ってほしいといっている。

一九二四年（大正13）一月――マールブルクに寒波が到来し、ラーン川がすっかり凍ってしまい、徒歩でわたれるようになった。三木（27歳）は休暇中、どこへも出かけず、下宿でディルタイのものを読んですごした。月末ごろ、ハイデルベルクに森　五郎を訪ねた。

三月――二月末に届くはずの岩波からの送金が郵便のおくれでとどこおり、生活費に窮したため、ハルトマン教授が執筆し『思想』にのせてもらった原稿料百六十円に手をつけてしまった。三木はハイデルベルクで岩波からの送金を受けとるために、三月中旬ごろに再びこの町をおとずれ、ほどなく帰国の途につく森　五郎と会った。この間三木は、アリストテレス、アオグスティヌス、ディルタイ、シュレーゲル、ハルトマンなどの著作を多くよんだ。ディルタイやジンメルのものを読むことによって、人間学や生の存在論への志向が生まれつつあった。

三月末、三木は二週間ほどの予定で旅行に出、まずミュンヘンを訪れた。みぞれが降るこの町で、ホテルの部屋に閉じ込もると、デカルトをよみ、夜は音楽会に出かけた（3・30付、森　五郎宛絵はがき）。

ミュンヘンよりウィーンにむかい、この市で美術館をおとずれ、ヴェラスケスの絵をみたり、書店をひやかし、ツインマーマン、ベルンハイム、アオグスティヌスなどのものを手に入れた。ウィーンでは、渡欧のとき船中で知りあいになった建築家・上野伊三郎と再会したようだ。

ある本屋に入ると、アンドレ・ジード（一八六九～一九五一、フランスの小説家・批評家）の書がたくさん並んでいた。そのころ三木は、著者のジードのことを何も知らなかった。が、柵にたくさんその者の本が並んでいたことから、著者は重要な流行作家であろうと思い、何冊かもとめ、カバンの中に入れた。そしてウィーンからの汽車の中で、『背徳者（インモラリスト）』をひもといた。そのとき何か新しいものにふれたような気がした。マールブルクに帰り、レーヴィットにその話をすると、この博学なドクトルは当然ジードのことを識っており、いろいろ著者について語ってくれた。

ウィーンは三木にとって、やわらかな町。シュニッツラー（一八六二～一九三一。オーストリアの劇作家・小説家）の町であった。ひじょうに居心地のよい町であった。かれはウィーンよりハイデルベルクにむかい、リッカート教授と会った。かれは近々刊行するじぶんの仕事の話をしていた。

マールブルクに戻った三木は、大学の授業にふたたび顔をだしたり、下宿で読書にひたったりして、時をすごした。陽気は寒い冬から急に夏になったような気がした。ラーン川の河原の草もいつの間にか伸びていた。空を飛んでいる鳥のすがたをみた。川の水の色は、もう夏をおもわせた。

マルティン・ハイデガー

朝は四時半に明るくなる。かれはいつも六時に起きると、七時から始まるハイデガーの講義に出席した。はじめのうち早朝の授業には閉口したが、いまではそれにすっかりなれていた。あるとき、二人はこんな会話をした。

ハイデガー――君も，夜鳥（ナッハトフェーゲル），ですか。

三木――――先生は時計ですね。，起こす人（ヴェッカー），ですね。

こういうと両人は大いに笑った。

暖気がまし、むしあつくなるにつれて、勉学の意欲がそこなわれ、何ごとにも手がつかなくなるときもあった。倦怠（けんたい）、もの憂（う）さに襲われた三木は、野原にでて草の

うえに寝ころび、空をながめてくらした。ふたたび元気になったときは、ラーン川の対岸の小高い丘を歩いたりした。草の色をみると、うさが晴れるような気がした。

その間にもパリへ行く心ははやっていた。八月上旬、かれはハイデルベルクを訪れると、リッカートやホフマンに別れのあいさつをした。三木はドイツを去り、その後は〝旅の者〟となって、新しい土地をたがやす必要を感じていた。哲学における体系的な研究をおこない、じぶんの思想をまとめねばならぬと思っていた。ドイツを去るにあたり、じぶんの行動のあり方を振りかえり、考えてみた。――ドイツで学んだものは何だったのか。何を経験したのか。何を信じることができたのか。

三木はこれらの問に対する答を出さないまま、〝旅人〟としてドイツを離れるつもりだったようだ（7・31付、森　五郎宛書簡）。

四　パリ

一九二四年（大正13）八月二十日の夕ぐれ――三木はあわただしくマールブルクを発った。汽車はマールブルクからギィーセン（ドイツ中部、フランクフルト＝アム＝マインの北六六キロ）――ジーゲン（ケルンの東一〇一キロ）――ボン（ケルンの南三五キロ）をへてケルンにむかったものか。その晩は大聖堂（ドーム）があるケルン（ドイツ中西部、ライン川河畔の町）で一泊した。翌日は市街見物にあて、ふたたび車中の人となり、アーヘン（ケルンの西七〇キロ、オランダ・ベルギーとの国境ちかく）をへて、二十二日の正午まえにパリの北駅に着いた。

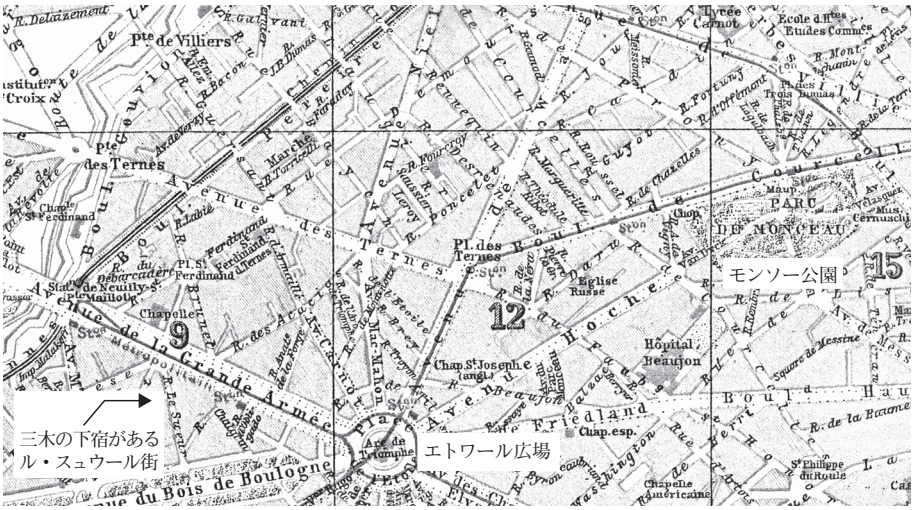
下宿はソルボンヌ大学に通っている小林市太郎（一九〇一～六三）にたのんであった。小林は京都のひと。同志社中学をへて、大正九年（一九二〇）九月京都帝大文学部哲学科選科に入学し、十二年（一九二三）三月に修了した。同年四月フランスに渡り、十月ソルボンヌ大に入学すると、美術を専攻し、十五年五月修了した。三木と小林はいわば同門、京大哲学科の出身であったから、お互いよく知っていた。

小林がみつけてくれた下宿は、凱旋門があるエトワール広場（現・シャルル・ド・ゴール広場）のすぐ近く――

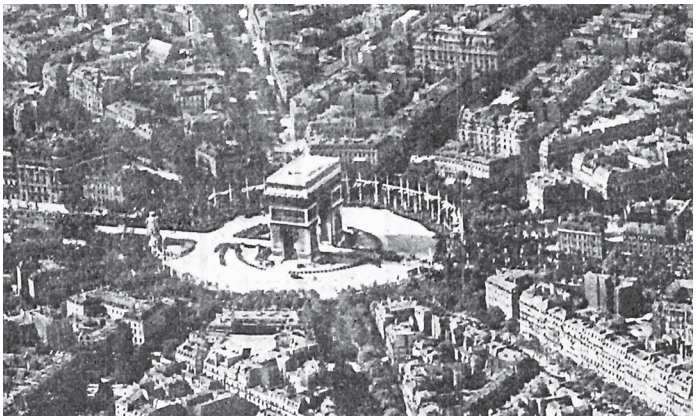
パリ十六区　ル・スュウール街二十六番地。
グイユロ夫人方

であった。そこは安倍能成（あべよしなり）や速水滉（はやみひろし）らが下宿したところでもあった。その下宿は路地にあるから、通行人や車馬の音が聞こえる、すこしうるさいところであった。が、パリのことだからがまんすることにした。

当時、このアパルトマンの一階は、居酒屋のようなキャフェであり（いまはトルコ式浴場）、三木の部屋は、三階のあまり陽の入らない、細長



エトワール広場と三木の下宿があったル・スュウール街



エトワール広場

パスカルの肖像

いくらい部屋であった。窓は一つしかなく、窓ぎわに粗末な机とイスをおいて勉強していた（芹沢光治良「巴里の三木　清君」『回想の三木　清』所収、文化書院、昭和23・1）。

はじめパリでくらすのは、三、四ヵ月ぐらいと思っていたが（イギリス――オクスフォードに移ることを考えていたので）、計画に反し、約一ヵ年の逗留になった。知らない土地でいちばんこまるのは言葉であるが、早くそれに慣れる必要があった。会話ができないと、用がたせないから、元小学校の先生であった年配の女性にフランス語会話をならった。

三木ははじめからパリに長逗留する気がなかったから、今回は大学に籍をおかなかった。フランス語を聴くことにすこし自信がもてたので、見物のつもりでソルボンヌの公開講義にでかけ、哲学者のブランシュヴィク教授（パスカルの専門家）の講義を数回きいた（「読書遍歴」）。しかし、三木はそれを聴いて理解できたかどうか何もかたっていない。おそらくよくわからなかったのではなかろうか。

三木はドイツ時代とおなじように、下宿にこもると、読書に多くの時間をさき、テーヌ、アナトール・フランス、ルナンのものを読みはじめた。やがてむかしレクラム版の独訳でよんだことがあるパスカルの『パンセ』を手にとった。三木はいう。

「私はふとパスカルを手にした」と。そしてそれを原語で読むうちに、こんどはこの書のとりこになった（「読書遍歴」）。

かれのことば通りだと、パスカルの『パンセ』を再発見したのは、パリにおいてということになる。その時期は秋から冬にかけてのことか。が、すでにハイデルベルクにいたとき、森との会話のなかで、パスカルのことが話題になったふしがある。森はいう。「そのころ（三木がアリストテレスの研究に没頭していたとき）わたくしはパスカルを読んでいたが、そのときのかれはむしろそれに反対した。しかし、後にかれはパスカルに没頭した」（羽仁五郎「三木　清遺書　第一巻のために」『三木　清著作集　第一巻』所収、岩波書店、昭和21・9）。羽仁こと森がいう「それに反対した」とは、どういう意味なのかよくわからないが、三木は森がパスカルの『パンセ』をよむことに不賛成であったということか。

三木はハイデルベルクやマールブルクにいたころから、すでにパスカル研究をはじめる意図なり、腹案があったように思える。守屋貫教は、一九二四年（大正13）の夏学期がおわると、K博士はベルリン大学へもどり、「M君（三木）はそのパスカル研究を仏蘭西（フランス）に於（おい）て大成（たいせい）すべく巴里（パリ）へ

移られる」と記している（「滞欧雑感　其一　マールブルクの生活」）。

したがって三木が「読書遍歴」において語っている「そうだ、パスカルについて書いてみようと私は思い立った（新たな考えをおこした意）」とある記述は、読者を煙にまく、三木一流の欺まんかも知れぬ。

三木はドイツ哲学にこそ造詣が深かったが、ことばの問題があって、フランス哲学にはそれほど精通していなかったかと思える。しかし、かれはつねに未知のものに対して憧れがあった。長いあいだ考え慣れていたドイツ哲学の土地をはなれて、フランスに移り住んだのも、未知のものに対する憧憬からという。

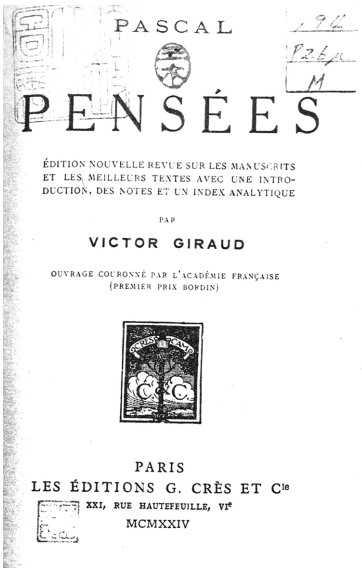
かれはパスカルをはじめとするフランスのモラリスト（人間探究家）――モンテーニュ（一五三三～九二）の『エセー』、ラ・ブリュイエール（一六四五～九六）の『カラクテール』、スイスのプロテスタント神学者ヴィネ（一七九七～一八四七）の『十六、七世紀のモラリスト』に興味をおぼえ、それらの本をあつめだした。が、いちばん関心があったのは、パスカルであった。かれは

ストロウスキーの*『パスカル』　＊ Fortuna Strowsk.
ブトルーの**『パスカル』　＊＊ Pierre Boutroux.

パリの三木　清の下宿（26, Rue Le Sueul 16 arr. Paris）。1階はトルコ式浴場。（By Courtesy of Prof.P. Navailh）

等々の文献をあつめ、よみはじめたといっている（「読書遍歴」）。

しかし、三木が収集したパスカル文献はこれだけにとどまらない。三木文庫に独仏語のものが計四十余冊ある。もちろんかれはこれらの文献のすべてを読んだわけではない。が、『パンセ』は、かれの枕頭の書（まくらべに置いてよむ本）になったという。のちにかれがパリのうす暗い部屋で執筆した処女論文「パスカルと生の存在論的解釈」は、原稿用紙がなく、洋けい紙にかいて、日本へ送ったもので、『思想』（第42号、大正14・5）に掲載された



三木が精読したヴィクトール・ジロー編『パスカル　パンセ』(1924年)

(二五三〜二八五頁)。この論文(のちに「人間の分析」と改題)は、どのような内容のものか。一章、二章…といった章立てはなく、[一]〜[三]までの三部構成である。かれがこの小論の中で問題提起したものは、つぎの点であった。

五　三木　清の「パスカルと生の存在論的解釈」

[一]

パスカル研究において等閑視されていたものは——人間の研究。

三木はハイデガーの方法——解釈学(人間精神の産物は、人間が体験したことを表現したもので、表現を通してもとの体験を理解しようとするやり方)にならい、パスカルの多岐にわたる思想研究のうちなおざりにされていた点、人間研究、に光をあて、その部分を切りとり、解剖し、六篇の論文を一冊にまとめ、岩波書店から刊行したのが、三木の処女出版『パスカルに於ける人間の研究』(大正15・6)であった。

三木はパスカルについてまず論文「パスカルと生の存在論的解釈」(『思想』第42号、大正14・5)を発表し、のち『パスカルに於ける人間の研究』(岩波書店、大正15・6)を出版するとき、本稿に手を入れた。そのさいに精読し、かつ依拠したものは——「原稿を見直した新版。よりすぐれた本文。序論、注、分析的な索引つき」と、うたった、つぎの書であった。

Victor Giraud 編 *Pascal Pensées*, Les éditions G. Crès et Cie, Paris, 1924
ヴィクトール・ジロー編『パスカル　パンセ』ジェ・クレ出版社(パリ)、一九二四年刊。

本書はタテ15.3㎝ヨコ10㎝、計四五二頁。本書は、つぎのようなものから成っている。

序文　ヴィクトール・ジロー筆「パスカルの『パンセ』の近代性」一～一七頁。
諸言　一九～二五頁。
予備的な注　二七～二八頁。
覚書　二九～三二頁。
イエスのなぞ　三三～四五頁。
パンセ
項目　一　精神と文体についての考察　四七～六六頁。
二　神をもたぬ人間の不幸　六七～一二三頁。
三　賭（かけ）の必要性　一二四～一五三頁。
四　信仰の手段　一五四～一七〇頁。
五　正義と現象の理由　一七一～一八七頁。
六　哲学者たち　一八八～二〇八頁。
七　道徳と教義　二〇九～二六〇頁。
八　キリスト教の基礎　二六一～二七五頁。
九　永続性　二七六～二九九頁。
十　表徴　三〇〇～三二二頁。
十一　預言　三二三～三五七頁。
十二　イエス・キリストのあかし　三五八～三七九頁。
十三　奇跡　三八〇～四〇五頁。
十四　論争的断章　四〇五～四二三頁。
分析的な索引　四二五～四五九頁。

三木はジローが編んだ『パンセ』の文章を少しずつたどり、その意味をさぐろうとした。かれは『パンセ』をよみ、それについて考えるにつれて、「ハイデッゲル教授から習った学問が活きてくるように感じた」という（「読書遍歴」）。三木がハイデガーから学んだもの、示唆をうけたもの

とは具体的にどのようなものであったのか。本人はそれについて何も語っていない。が、志した研究は、認識論上のさまざまな学説を批判する仕事（研究）をはなれ、もっと具体的な事実の研究――じぶんの問題（自己の存在の解釈と生の批評）――すなわち、現実的存在の自己開示（じぶんの存在を意識しているのは、人間だけであり、そのことを明らかにすること）であったのであろう。

三木はいう。

パスカルの思想において、中心的な意義をもつものは、〝人間の概念〟である。人間について、独自な方法――特殊な見方が、かれの思想に個性と光彩をあたえている。

かれは人間とは何かという問いを追う（激しさ、やさしさ、おそれ、あわれみをもって）。しかし、この問いは、長いあいだ学問の前景（前面）にもち出されなかった。この忘れられた問いを思いだすことが至急を要することである。（人間にふさわしい、真の研究――パスカル）。

人間とはいかなる動物か。

パスカルが問題にした人間とは、心理学者の意識や精神ではない。かれが取りあつかう人間は、〝対象〟でなく〝存在〟である。それは認識主観にたいして成立する〝客観〟ではなく、存在のうちの特殊なる存在である。それは純粋自我〝先験的自我〟でなくて、論理学や認識論でいう理念としての人間でもなく、具体的な現実である。

パスカルの人間研究とは。

人間的存在の研究である。人間の存在を分析し、解釈することをめざしたものである。われわれの存在は、〝自然における存在〟である。自然におけるわれわれの存在は、〝中間者〟である。

中間者とは何か。

自然の高さ、大きさ、宇宙にくらべると、地球は点にすぎない。

われわれの体は、宇宙全体において知覚できぬもの、虚無に対しては、ひとつの世界、むしろ全体である。それは無と全（すべて）との間の〝中間者〟である（パスカル）。人間の中間的存在である。われわれは自然における存在である。（注・天使と動物との中間者（「パスカルの人間観」）。

私（三木）は、単に世界のうちにあって、宇宙的感情を感じる。人間は世界の中にあると共に、ある状態性にある。人間の存在は、自然におけ

る存在として規定される。

この形式的な規定をどのように充実させてゆくか。

［二］

人間の具体的なる存在性の概念は、〝生〟vie（ヴィ）である。現実的存在は、運動せる存在である。〝生〟とはこの運動の具体性の概念である。われわれの本性は、運動にある。全（まった）き休息は死である（パスカル）。

・運動の概念は、時間の概念とともに与えられねばならぬ。

・時間の分析。生の動性の第一の契機、不安定。

・生の動性の第二の契機（きっかけ、動因）――人間は矛盾にみちた存在である。パスカルにとっての娯楽は、けんたいと不安定を否定することから生れたたのしみである。想像（物を在るがままに見ることを妨げる能力）

・虚偽（きぎ）――存在の特殊なる〝存在〟のしかた、在るがままをおおうこと、かくすこと、すなわち人をあざむくことをいみする（パスカル）。

［三］

〝生〟の動性は、まず〝不安定〟と〝けんたい〟、第二に〝娯楽〟として現われ、しかもその後の契機が、あたかも動性の否定としてはたらく。生はひたむきなる〝前進の過程〟ではないという（三木）。

〝意識〟のいみを明かにするために、想像について考えてみよう。想像はわれわれの魂を拡大し、縮小する能力である。それは多くのばあい、生の不安をしびれさせ、にぶらせる。パスカルのいう〝意識〟（自覚的なもの）は、人間的存在の動性である。パスカルは自覚的意識をもつ者を〝哲学者〟とよんだ。哲学は生そのものの自覚にほかならない。

人間がすむ世界は、〝問われるべき〟性質をもっている。人間の存在そのものも、問われるべき存在である。それはそれ自体において問われるべき性質をもっている。

われわれにとって最も主要なことは、〝生〟の発見であり、論理的な斉合（整）した（むじゅんのない）体系ではない（三木）。

人間は天使であり、動物でもある。人間は固有なこと、自己意識（自覚）を有する存在である。しかし、人間は自覚において、その悲惨を知る。人生は不幸にみちている。不幸を考えないようにするため、人間はさまざまの〝慰戯（いぎ）〟を考えだす。それは遊ぎ、娯楽だけを意味せず、人間が営

むすべての活動をいみする。不幸の絶頂は、〝死〟である（三木）。

世に真実、真理は、ひとつしかないのである。しかし、解釈は多様である。千差万別である。三木が描いたパスカルの人間像は、生地（じっさい）のパスカルと、ややちがったものになっているらしい（由木）。

三木が後年、『パスカルに於ける人間の研究』を上梓するとき加筆した「序」をよむと、かれの論題（議論の題目）がよくわかる。その「序」を意訳し、摘記すると、つぎのようになる。

問　フランス文化を知るために読まねばならぬ本とは。

答　ファーブル、モンテーニュ、ラ・ブリュイエール、パスカルのもの。

問　これら四人の共通点とは。

答　人間の研究をめざしていること。人間の研究は、フランス思想史において伝統がある。

この小書は、パスカルにおける人間を研究したものである。といい、研究対象を人間に限定するつもりだという。パスカルの思想は多方面にわかれているが、じぶんが取り扱うのは、人間についてのかれの考えであるという。

問　『パンセ』の主な目的とはなにか。

答　宗教的なもの。

問　パスカルの宗教的思想の特色とは。

答　人間について観察したこと。

さらに三木はいう。『パンセ』には、心理学（感覚、情緒など精神のはたらきを研究する学問）を発見できない。アリストテレスの『デ・アニマ（魂、生命）』を心理学書とみなすことをやめると同じように、パスカルのこの書を心理学として考察してはならない。

もしこれらの書を心理学として呼びたければ、心理学の概念によって何を意味するかを、あらかじめ説明する必要がある。

問　われわれが『パンセ』において見いだすものは何か。

答　われわれは意識や精神の研究をみいださない。われわれがそこに見いだすものは、具体的な人間の研究――すなわち、アントロポロジー

である。アントロポロジーとは、人間の存在についての学問である。

三木によると、アントロポロジーは、人間の〝存在のしかた〟（存在の方法？）――一つの存在論（存在そのもの。存在とはなにか。その根本的な問題を研究する学問）だという。かれがもくろんだのは、『パンセ』を〝生の存在論〟として取り扱うことであった。

三木はパスカルの『パンセ』を解釈するとき――すなわち文章を読者の側から理解しようとするとき――、わざと一つの方法を用いたという。かれがいう〝解釈のしごと〟とは、別ないい方をすると、つぎのようなことだという。つまり、――概念（大まかな認識内容）の与えられているところでは、その基礎経験を、基礎経験の与えられているところでは、その概念を明かにすることであった。

三木はいう。ある書物においては、あまりにも多くの経験とあまりにも少ない概念がある。また他の書物において、この逆のばあいもある。あまりにも多くの概念と、あまりにも少ない経験が。そのときわれわれは、それらの概念を破壊して、経験までさかのぼる努力をする必要がある。こうしてこそ完全に理解することが可能である。三木が解釈において目ざしたのは、経験を概念において、概念を経験において理解することであった。

三木は『パスカルに於ける人間の研究』において、手はじめに「パスカルと生の存在論的解釈」をかき、そのあと五篇の論文をかき、そのうちの三篇はパリで執筆し、さいごに一書とするのである。が、その排列はそのまま三木のパスカル研究の過程（みちすじ、プロセス）と生長を物語るものであった。六つの論文は、それぞれ独立したものであるが、全体としては一つの構造をもったものという。第一篇は、第二篇によって補われ、第三篇はそのまえの第二篇によって準備されたものである。すなわち、個々の論文は、お互い足りない点を補いつつ、完全にしたということであろう。

三木はいっている。どんな文章も、それを書きおえ、いったん印刷にふされ、書物となると、その本は著者からはなれる。その書は独立した運命をもって存在する。著者はじぶんの本がもつ運命を愛すべきである、と。かれはじぶんが書いたものが、読者によって好きなように読まれ、好きなように理解されることに満足した。が、できれば六つの論文を書かれた順序でよんでもらいたかったようだ。

いずれにせよ三木は、「パスカルと生の存在論的解釈」のあと、「賭」「愛の情念に関する説」を書き、それらを日本に送ると、帰国後さらに

「三つの秩序」「方法」「宗教における生の解釈」をかき足した。そしてパスカル論六篇をまとめ『パスカルに於ける人間の研究』と題して岩波から出版した（大正15・6）。しかし、この本の売れゆきはわるく、返品が多かったという。その理由として、パスカルの名は、わが国では一部の専門家をのぞき、よく知られていなかった。『……人間の研究』ということばも、読者にはなじみのないもの、親しみがもてぬものであった。何よりも一哲学徒にすぎぬ三木の名は、無名にちかく、読書界において知られていなかった。

かれが書いたものが、売れだしたのは、新聞や雑誌などに文章を書きはじめてからのことである。いずれにせよ、三木のパスカル論の評判は、悪口かほめことばかのどちらかであり、評価を二分するものであった。

好意的でない評価を下した者……カトリックの哲学者・吉満義彦。同人は三木を「あまり高く評価しなかった」という（由木（ゆうき）　康（こう）『私のパスカル体験』春秋社、昭和56・9、一四頁）。

評価した者……「わたしはこの書（『パスカルに於ける人間の研究』）によって、パスカルとの結びつきをいっそう決定なものにすることができた」（由木　康、前掲書、一四頁）。

谷川徹三は、三木のこの本に、思想の根源性をみいだすことはできなかったが、「日本の哲学の今後の発展のうえには、大きな意味をもっている」という（『谷川徹三集』日本書房、昭和33・3、一六四頁）。

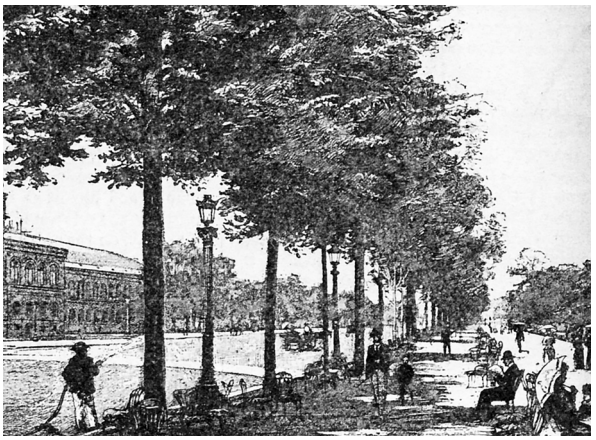
これはハイデガーの存在論的解釈学の方法を用いての「独自の『パンセ』解釈である。これはきわめて水準の高いものであり、その文体の特徴もあわせて、わが国の思想界に与へた影響は多大である」（前田陽一編『世界の名著『パスカル』中央公論社、昭和41・11、五八頁）。

ベルリンやパリといった大都市で一人でくらすことは、孤独なものという。三木はパリでいつも多くの日本人をみたが、あえてかれらとの交際を求めなかった。たまに会い、つきあった同胞は――

小林市太郎（一九〇一～六三、京大の学友、当時ソルボンヌで美術をまなぶ）

芹沢光治郎（せりざわこうじろう）（一八九七～九三、のち農商務省の役人をやめ、小説家に転身。当時、休職し、ソルボンヌ留学中）

芹沢光治郎



シャンゼリゼ大通り（パリ）

らであった。

偶然出会った日本人に、斎藤茂吉（もきち）（一八八二～一九五三、大正・昭和期の歌人、医師）や板垣鷹穂らがいた（「読書遍歴」）。三木は散歩や食事に出たり、セーヌ河岸の古本屋（ブキニスト）、カルチエ・ラタンの書店をひやかしたり、美術館をみたり、たまに友人と会って話をすることを除くと、下宿にひきこもり、読書や執筆に没頭した。

パリもベルリンと同じように、第一次大戦後、日本の円がつよく、フランが弱かった。だから日本人がつぎつぎとやって来て逗留するようになった。三木がパリにいたころ、どのくらいの日本人がこの市にいたのか。その数は明らかでないが、おそらく千人や二千人はいたのではないかという（芹沢「巴里便り」）。天長節（天皇誕生日）のとき、日本大使館が招待した日本人は六百数十名というから、あるていどの数が推定できよう。

芹沢によると、大通り（ブールヴァール）を歩いていると、かならず妙に深刻な顔をした日本人と会ったという。黄色い顔をし、メガネをかけ、カメラをぶらさげていたら日本人であった。もしカルチエ・ラタンの古本屋で、目をさらにして古本をあさっている東洋人がいたら、その者は日本人であった。古本屋の主人の話だと、みんな申し合わせたように社会主義の本をさがしていたという。音楽会に行っても、芝居をみに行っても、数軒ある日本料理店、中華料理店へ行っても、日本人に会わないことはなかった（芹沢「巴里便り」）。

パリを遊興の地とおもっている日本人――、日ごろ日本政府から金と暇をもらっている日本人は、三木の下宿がある、右岸の十六区を〝日本居留地（コロニー・ジャポネーズ）〟とおもっていた。こういった日本人は、日本大使館を中心に、世界のブルジョアの仲間入りをして、一つの居留地（コロニー）をつくっていた。一方、

まじめに仕事や勉強をしているプロレタリア（貧しい人々）は、お高くとまっている居留地の人々から、「むこうの人」とさげすまれていた。かれらは左岸の国際街――ラテン区やモンパルナスに分散していた。この二つの種類の日本人は、同胞でありながら、セーヌ川を境とし、互に越せない〝垣根〟に作っていたのである（芹沢「明日を逐うて」）。

パリにおける三木の私生活については、わからぬことが多い。日記でもあれば、かれの動向がわかっておもしろいだろうが、かれは毎日の出来事を記録しなかったようだ。しかし、三木が帰国するまでの二・三ヵ月のあいだ、交際したのは芹沢光治郎であった。

芹沢は、あるていどパリにおける三木について書き残しているから、三木のうごきについて知ることができる。芹沢が農商務省の山林局を休職あつかいにしてもらい、新妻をともない、神戸より貨客船・白山丸にのり、四十数日の船旅をへてパリに着いたのは、大正十四年（一九二五）七月のことであった（注・三木はすでに約一年まえにパリに来ている）。夫婦は二週間ほど日本大使館（9 Rue Perouse）に近いホテルに滞在したのち、パリ十六区ボアロー街四十八番地――バルザックの研究家アンドレ・ペルソール家の一階の部屋を借りることにした。下宿はパリの西部――ブーローニュの森とセーヌ川に近い、閑静な通りにあった。

当時、パリにいる日本人は三つの方法で下宿したという。

一　フランス人の家庭に入り、間借りをする者。
二　パンスィヨン（三食つきの下宿屋）に入る者。
三　ホテル（朝食つきの部屋を貸す下宿屋）に入る者。

ほかに、五、六階の大きな建物のなかの幾間かを借りる方法もあった。

芹沢夫妻が借りたのは、通りに面した門口に、Pension de Famille（下宿屋）と書いてある、庭つきの古い三階家であった。このような住宅はパリでは珍しく、ぜいたくなものであった。

パリの中産階級の家庭では、インフレ地獄を切りぬけるために、外国人を下宿人にむかえ、その外貨をあてにして暮らしていた。芹沢夫妻の家主は親切なうえ、たいへんな親日家であった。そのころフランスは、インフレにより、フランが暴落し、逆に日本円の価値は高かった。一円が二百円、三百円にもなり、一ドルが二円であった。

芹沢が文部省からもらう留学費は、月平均三八〇円であった。当初、円のおかげでぜいたくな暮しができたが、インフレが落ちつくにつれて、円価がさがり、生活がしだいに苦しくなった。そのためカルチエ・ラタンの大学に近い、小さなホテルの一室に移らねばならなかった。

芹沢は一高に入学する前から、三木のことを知っていた。芹沢の兄が一高のボート部のコーチをしていたので、三木の裸体写真をみていたからである。一高では、三木は芹沢の三年先輩であった。寮で会うことがあっても、とくに親しくしなかった。三木と同じボート部にいた菊池武一は、芹沢がパリにおもむくとき、三木さんがパリにいるから会ってみろ、といった。が、同人は三木の住所を知らなかった。

芹沢はパリに着いたとき、三木を訪ねる気はなかった。しかし、パリ大学のめんどうな入学手続をおえ、講義にでても、フランス語がよく聴きとれず、めざすフランソワ・シミアン教授の研究室に入れるかどうかも分からなかった。いろいろ不安になり、三木の名を思いだし、会ってみようと思った。三木は哲学をやっている人だし、勉強について何かよい忠告をしてくれるかも知れぬと思った。

三木の住所を日本大使館で聞いたら、すぐわかった。かれの下宿は、大使館からそう遠くなく、雨がふってきたが、帰途をたずねたらすぐ会ってくれた。そのとき三木はどのような部屋で、なにをしていたのか。

――その部屋はひじょうにくらく、装飾のないもので、机とベッドと本しかなかった。三木はその部屋の机で、パスカルの論文を書いていた。それを日本へ急いで送るのだといった。パイプにタバコをつめ、それを吸いながら、パリ生活についていろいろ助言をした。このとき三木は、パリの日本人とつきあってはいけないといった。いずれ論文をかきおえたら、また会いましょうといい、その日は別れた。

会話のなかでテーヌが話題になったようで、三木から同人の著述をよむことを勧められたので、帰途古本屋に寄って五冊もとめた。それはアシェット版のよみやすい版であり、フランス語の勉強にとってよさそうであった。

三木から、パリの日本人と交際しないように、と忠告をうけたが、芹沢の下宿は、日本の外交官補を下宿人として置くようなところであり、日本人の客が多く、日本人の〝小さなたまり場〟でもあった。だから芹沢の下宿は、かれのパリ生活にとって不むきな所であった（「四　三木　清

君」「巴里便り」)。

それから数日後の午後二時ごろ、三木が芹沢の下宿をおとずれた。

――ムッシュ　セリサワ　お客さんです。

というから、庭におりてみると、黒い帽子(ソフト)をかぶり、くたびれた黒い服を着、色あせたよれよれのレインコートを着た男が椅子にすわっていた。三木はいつも黒い服を着、黒いネクタイをしていたから、葬式の帰りのようであった。

三木はその家に通されるとき、マダムにろくにあいさつをしなかったらしい。ましてや庭で帽子をかぶったまゝであったことが、あとでひんしゅくを買った。

三木　清

三木は芹沢を散歩につれだした。二人はセーヌ河畔にそってサンクルー橋のほうまで歩き、その橋のたもとのカフェに入ると酒を注文し、それを飲みながら、よもやまの話をした。酒は夏ならばビールを、冬ならばアペルチーフをたのみ、焼グリを酒の肴(さかな)にした(芹沢「巴里の三木　清君」)。

が、雑談のなかで、三木がいちばん夢中になってしゃべったのは、〝人間学〟についてであった。芹沢は三木が熱っぽく語る〝人間学〟の話にひじょうに興味を覚えた。両人は夕方別れたが、芹沢が下宿に帰ると、かれの旧友で外交官のTから、家のマダムが、あんな無作法な者をみたことがない、とぶつぶついっていた、と、聞くと、胸にこたえた。

芹沢はその詰問にたいする反論として、

――あれは三木　清といって、将来の日本の哲学を背負ってる人だよ。

と、勢いこんで答えるしかなかった。

芹沢がはじめて三木をたずねたとき、三木は日本へ帰る船がきまっていた。かれはパリ生活に未練があるようにみえた。三木がさいごにいっていたのは、フランスの事物を勉強するにしても、ヨーロッパ精神、フランス精神を忘れてはならぬ、というものであった。

三木との最初の出会いがきっかけとなり、芹沢はその後かれとよく会った。二人は三木の下宿にちかい、ブローニュの森大通り(ブールヴァール・ボア・ド・ブローニュ)や森(ボア)の中を歩いたりした。

三木は勉強のつかれをいやすために、土曜日の晩などときどき下宿のマダム（庶民階級の出身で小ぶとりな女性）と場末の劇場に映画をみにゆくことがあった。が、音楽会やオペラには出かけなかった。

芹沢には「閉された庭」という短篇小説（『中央公論』昭和21・12）がある。それは焼跡にたてたバラックで暮らす小説家一家の物語である。この一家のあるじの夢は、第一次大戦後パリでくらしたように、再び二人の子供らとパリで数年くらすことであった。二人の子供――むすこは絵描き、娘は音楽家であった。二人は焼け残った書庫のなかに入って金目のものをあさっていたら、こんなものが出てきたといって一枚の写真と一枚の書簡箋を父親にみせた。写真は軍国主義の犠牲になって倒れた一木が、パリの記念にミジェ Midget という写真館でとったものであった。書簡箋のほうは借用証書であった。

写真は礼服を着た一木が、パリを去るときに主人公にあたえたもので、「西田博士がこう署名して、ぼくに写真をくれたから、まねておきましょう」といってサインしたものであった。その写真の左のすみに、活字のような特徴ある筆蹟で――

杉　敏介殿恵存　　巴里　一木　浩

千九百二十五年十月

と署名した。また借用証のほうは、

借用証書

一　金四千五百法也

右借用仕候也然ル上ハ大正十四年十二月一日ヲ期限トシテ返済致候コト相違無之依テ後日ノタメ証書如件

大正十四年十月一日

杉　敏介殿

一木　浩
○大学文学部

とあった。一木は日本からの送金をまっていた（岩波は震災後も三木の留学費を送るつもりであった）が、送金はとどこおり、やむなく杉に借金を申し込んだ。杉は帰国できないでいる一木の窮状をみかねて、妻の反対にもかかわらず、金を用立てた。が、金は返済日である十二月一日になっても返ってこなかった。妻はあなたはお人よしだから、だまされた、と夫をなじった。

翌大正十五年（一九二六）の春すぎ、杉の親友Bから手紙がとどいた。パリに来てはじめて受けとるBからの手紙であった。それをよみながら杉の顔色がかわった。文面は、一木が帰国してから、親しい仲間がひらいた歓迎会のようすを知らせるものであった。一木はこんなことをいったという。杉に金を借りて帰国したが、杉のような金持ちの息子の金はつかってやるべきで、返さなくてよいのだ、と。Bは杉よりも一木としたしかった。Bはウソをいうような男ではない。

杉は一木の借金問題を永久に胸にしまっておくつもりであったが、なぜかれが仲間に公表したのか理解できなかった。杉は日本の将来のために、一木の学問に期待し、人格を信頼して金を用立てたのに、やりきれぬ気持であった。杉は一木に釈明をもとめる手紙をだした。折返し返事がきた。酒の席のこと、ことばが足りなかったであろうし、聞き手も誤解したのであろう。じぶんの力で稼いだ金で返さいするから、もうしばらく待ってもらいたいといった内容であった。

けっきょく一木は、杉に四五〇〇フラン返さずにおわったようである。かれは杉に負い目があったから、杉から遠ざかるようになったが、著書が出るとかならずサインして贈ってくれた。しかもときどき思い出したように、ひょっこり訪れて来るときもあったが、すぐ帰った。

芹沢が「閉された庭」の中で、杉としるしているのは、じぶんのことであり、一木は三木のことである。三木にはほかにも金にまつわる黒いスキャンダルがある。京大の院生のころ家庭教師をした藤江家の未亡人（子供が三人ある）と親密な関係になった。三木は帰国するとき、その藤江夫人から、五、六百円の金をもらったらしい（田辺元宛西田書簡――大正15・3・25付）。が、これは何のための金であったのか不明である。

注・ルビは引用者による。

芹沢から借りた四五〇〇フラン、藤江家から出たと考えられる、当時の五、六百円は、いずれもちょっとした大金であろう。フランと邦貨を合わせると、いまの数百万円にも相当する額であろう。ちなみに大正時代の値段をみると、つぎのようになる。

うな重（並）……40銭（大正4）。
『コンサイス英和辞典』……1円30銭（大正6）。
小学校教員の初任給……12～20円（大正7）。
『週間朝日』……10銭（大正11）。

大正十四年（一九二五）十月――三木はドイツ、フランス留学をおえて帰国した。かれはいつ、どこの港から、どんな船にのって帰国したのかも不明である。乗船した所はマルセーユ、乗った船は日本郵船の「白山丸」であろうか。この船は大正十四年十月十五日神戸に入港した。ロンドン――マルセーユ――ナポリ（イタリア）で乗せた乗客（四十五、六名）の名は、「白山丸の帰朝者」として『神戸新聞』（10・10付）に掲載されている。が、なぜか三木　清の名はみあたらない。かれは二、三等船客であったのか。それとも別な船であったのか。

ともあれ、三木は神戸に着いたとき、母や兄弟らが待ちわびる実家に「アスカエル」という電報を打った。かれは田舎の駅から人力車にのって帰宅したが、外国から帰ったというより、ちょっとそこいらの旅から帰ったような感じであった。変なソフト帽を無造作にかぶり、着古した黒っぽい背広を着、カバンを一つもっていた。洋服の裏地は破れていた。二日ばかり家にいたが、土産はないし、外国の話も一つも出てこなかった（高井春江「思ひ出の糸」）。京都にもどるとき、神戸から荷物を送ったから受けとってもらいたい、というから、家の者は外国土産かと期待したが、それは洋書のつまった大きな箱三つであった。それでも家族は、かれが無事帰国したことをよろこんだ。

帰国した三木は、翌十五年（一九二六）四月から、講師として三高や大谷大学に出講した。京大には迎えられなかったが、その翌年の昭和二年（一九二七）に上京すると、法政大学文学部哲学科の教授に就任した。以後、独得の文体でさまざまな論文や論評を文学界や哲学会の諸雑誌に発表し、はなばなしい活躍をした。

六　同論文にみる三木　清の文体

三木の文体とは、かれの文章がもつ独得な様式（スタイル）――奇異な文体の意である。かれの文章は、一読してすぐわかるものではない。いったいにわが

国の社会科学者のかいたものは、一般大衆むきの新聞や雑誌をよむようなわけにはゆかぬ。一読して、内容がすぐ頭に入ってこないような文章やわかりにくい文章がほとんどであり、そういう文章をふつう悪文というらしい。が、三木の文章にもむずかしくて分かりにくい箇所がたくさんある。

三木にとっての最初のパスカル論「パスカルと生の存在論的解釈」は、けっしてやさしい読物ではなく、それを通読することはかなり辛気なしごとである。この論文は『パスカルに於ける人間の研究』の序奏をなすものであり、何か重要な伝言板の役割をはたしているに違いないが、つかえながら読了したとき、漠としたものしか頭に残らなかった。それは読み手の哲学論文の読書量の少なさ、理解力の低さだけに起因するものでなく、かれの文体がもつもっと根源的な欠陥にその理由があるのかも知れない。

三木の文体は、独得なものである。発想法があまり日本語的でない。まるで欧文を直訳したような表現が、かれが用いる日本語に溶け込んでおり、斬新な様式（スタイル）をつくっている。それは文語体と口語体の混交文——教壇から教師が学生にむかってむずかしい内容のものを講義するような口調のものである。ふんだんに出てくる『パンセ』からの引用文——その訳文をくわしく吟味すれば、書き手が原文を正しく読んでいたかどうかわかるであろう。

三木の文体の特徴を列挙すると、つぎのようになる。

不定人称代名語の多用。

一　ドイツ語の Man（マン）, またはフランス語の On（オン）を直訳し、「ひとは……」として用いる。世間一般の人をさすこの語は、ふつう訳出しないか、受身に訳して使う。「ひと」という表現をこのように使ったのは、三木が最初であるらしい（大久保孝治「清水幾太郎における文体の変遷」）。

一　欧文でいう単文章（主語、述語からなる）はすくなく、複合文章（二つ以上の単文章）が多い。

一　欧文（ドイツ語）をそのまま直訳したような表現が多い。

「……ことではなく、却（かえっ）て……」（……nicht……sondern）

「……ことは疑はれない」（Es besteht kein Zweifel, daß……）

注・否定の文（句）のあと、反対を強調する表現。

「……のは明瞭である」（……ist klar, daß……）
「……と彼は記してをる」（……Er schreint, daß……）
「……と述べてをる」（……sagt, daß……）
「……られねばならぬ」（……muß……）
「……しようと関心する」（……an et(j) interessiert sein……）

田中美知太郎によると、三木の森　五郎あての手紙にも興味ぶかいものがあるという。まずその文体が奇妙な感じをあたえる。かれは「…のである」といった論文口調の手紙をかいているからである。しかもそれは翻訳文のような口調なのである。

三木が外国から森にかぎらず、恩師や知人に宛てて出した手紙は、いったいにドイツ語やギリシャ・ラテン語などを散りばめた、混交文である。三木の翻訳文口調の文体は、枚挙にいとまがないが、たとえばつぎに引くものからもうかがえる。

「そしてそれ以来私はひそかにそれらの人々を軽蔑した」（マールブルクより森　五郎宛書簡、一九二四・一・一〇付）。

「私は多分マルセーユへ宛てて君へ次の手紙を書くことが出来るだろう」（マールブルクより森　五郎書簡、一九二四・三・一六付）。

さらに森宛の「君の東京の宛名を私へまで通知しておいて欲しい」という文章における前置詞の使い方をみると、擬似ドイツ語的に感じられるという（田中）。

ふだんドイツ語を耳で聞いたり、話したりする世界にどっぷりつかっていると、発想がだんだんドイツ人のようになるのかも知れぬが、三木清は講演においても、書いた文章そのままの口調でしゃべったという（田中）。つまり三木は、じぶんが用いる書きことばも話しことばと大きなちがいがなかったということであろう。それにしても三木の文体は、上下（かみしも）をまとったような、堅苦しいものである。

七　三木　清の『パンセ』読解

パスカルが書いた思索の断片を、後代の者が一書に編んだのが『パンセ』である。が、フランス語を母国とせぬ日本人が、この〝瞑想録〟を正しく読みとくことは容易ではなく、装備としてまず信頼できる原典や辞書・解説書・訳本などが必要になる。読解の方法とプロセスは、通読（ひととおり読む）――精読（細かいところまで注意してよむ）――味読（味わいながらよむ。鑑賞）――批評（作品のよしあし、価値を決定する）

である。原典批評は、解釈操作そのものである。解釈とは、読み手が原典の意味を理解する行為である。

三木はパスカル論をかくとき、邦訳を利用することなく（注・最初の『パンセ』訳は、前田長太（ちょうた）訳『パスカル感想録』洛陽堂、大正3）、原文（フランス文）にいきなり入っていったかと思える。が、『パンセ』理解の第一段階として、かれは原文を正しくよむことができたかどうか知る必要がある。これより原文をひき、三木訳を検討してみよう。

まずかれは論文の冒頭において、「二　神をもたぬ人間の不幸」（ヴィクトール・ジロー編『パスカル・パンセ』の六七～一二三頁）から一節を引用している（Victor Giraud 編 *Pascal Pensées*, 1924, P.67～P.123）。

*144. — J'avais passé longtemps dans l'étude des sciences abstraites; et le peu de communication qu'on en peut avoir m'en avait dégoûté. Quand j'ai commencé l'étude de l'homme, j'ai vu que ces sciences abstraites ne sont pas propres à l'homme, et que je m'égarais plus de ma condition en y pénétrant que les autres en les ignorant. J'ai pardonné aux autres d'y peu savoir. Mais j'ai cru trouver au moins bien des compagnons en l'étude de l'homme et que c'est la vraie étude qui lui est propre. J'ai été trompé; il y en a encore moins qui l'étudient que la géométrie.

「私は永い間抽象的な學問の研究に時を過した、そしてこの研究ではひとは僅かの交際しか得られぬと云ふことがこれに對して私に嫌悪の念を懐かせた。私が人間の研究を始めるやうになつたとき私は、これらの抽象的な學問が人間に適はしくないこと、そしてそれを突込んで知つてゐながら私はそれを知つてゐない他の人々よりも一層多く私の狀態に就て迷つてゐることを見た。私は他の人々がかの學問に關して僅かしか知らないことを宥した。然し私は少くとも人間の研究に於ては多くの友達を見出すこと、そしてそれが人間に適はしい眞の研究であることを信じてゐた。私は欺されてゐたのであつた、人間を研究する者は幾何學を研究する者よりも更に少數しかゐない。」(144)註。

三木訳をよむと、回りくどい日本語であることがわかる。原文がいわんとするところを、大むねて伝えているように思えるが、すっきり頭に入

ってこない、理解にくるしむ箇所もある。たとえば、「そしてこの研究（抽象的学問）では　ひとは僅かの交際しか得られぬと云ふことがこれに対して　私に嫌悪の念を懐かせた」の原文は、et le peu de communication qu' on en peu avoir m'en avait dégoûté. である。

三木がいう「この研究」とは、いうまでもなく「抽象的な学問」のことである。つぎの「ひとは僅かの交際しか得られぬ……」とある箇所は、抽象的な学問をやっている仲間との交際の意であろう。

この一文は、前田陽一訳（注・世界の名著　24『パスカル』中央公論社、昭和41・11）では、「そして、それらについて、通じ合うことが少ないために、私はこの研究に嫌気がさした」となっている。「それら（抽象的な学問）について、通じ合うことが少ないために……」も、文意がはっきりしない訳である。だれと通じ合うことなのか。「通じ合う」とは、人と意思の疎通をはかることができることであろう。パスカルの原文を直訳すると、「そしてひとはそれ（en――中性代名詞）についての交際をわずかしか持てぬため、それにうんざりした」となろうか。communication の語（人とのつきあいの意）をどう解するかが、この一文を正しく解釈する決めてとなる。由木訳では、「そしてそれによって交はり得る人々が少いのに嫌気を催した」（『パスカル瞑想録　（上）』白水社、昭和22・7）となっている。

平易に訳すと、「そしてそれ（抽象的な学問）によって交際できる人がすくないために、嫌気がさした」となろう。

「私は、これらの抽象的な学問が人間に適はしくないこと、そしてそれを突込んで知ってゐながら　私はそれを知ってゐない他の人々よりも一層多く私の状態に就て迷ってゐることを見た」の原文は、Quand j'ai commencé l' étude de l'homme, j'ai vu que ces scinces abstraites ne sont pas propres à l'homme, et que je m'égarais plus de ma condition en y pénétrant que les autres en les ignorant. である。この三木訳もわかりにくい。

原文を直訳すると、「わたしが人間の研究をはじめたとき、そういった抽象的な学問が人間にとってふさわしくないことを知った。またそれを知らぬ他の人たちよりも、それに深入りするわたしの方が、ずっとじぶんの状態に迷っていることを知った」となろう。三木は ma condition を直訳し、「私の状態」とし、前田は「自分の境遇」、由木は「自分の状態」と訳している。日本語で〝境遇〟というと、ふつう人が置かれている環境や状況をいみする。

由木　康は des sciences abstraites を三木や前田のように「抽象的な学問」と訳さず、思いきって「数学」としている。Je m'égarais plus de ma condition en y pénétrant que les autres en les ignorant は、三木訳では、「私は、……そしてそれ（抽象的な学問――引用者）を突込んで知ってい

ながら　私はそれを知っていない他の人々よりも一層多く私の状態に就て迷っていることを見た」と、まわりくどく、わかりにくい訳となっている。この一文は、前田訳では、「またそれ（抽象的な学問――引用者）に深入りした私のほうが、それを知らない他の人たちよりも、よけいに自分の境遇から迷いだしていることを悟った」となっている。

由木訳は、前掲二者の訳よりもさらにわかりいいものであり、「私は、……それを知らない人びとよりも、それに深入りしている私の方が、より一層自分の状態について迷っていることを覚った」となっている。

つぎの三木訳もわかりにくい。

Notre intelligence tient dans l'ordre des choses intelligibles le même rang que notre corps dans l'étendue de la nature. .

「我々の叡智は叡智的なるものゝ秩序に於て我々の自體が自然の廣袤に於けると同一なる順位を占めてをる」(72)。

これを前田訳では、

注・「二　神をもたぬ人間の不幸」（六七～一二三頁）。

「われわれの知性は、知的なものの次元において、われわれの身体が自然の広がりのなかで占めるのと同じ地位を占めている」となっている。三木はl'ordreを「秩序」とし、前田は「次元」と訳している。

由木は「位置」と解している。des choses intelligiblesを三木は「叡智的なるもの」、前田は「知的なもの」、由木は「思惟的な事物」としている。

由木訳のこの箇所は、「我々の知性は、我々の身体が自然の広がりの中で占めているのと同じ位置を、思惟的な事物の世界で占めているのである」となっている。

また三木はnotre corpsを「我々の自体」と訳し、一方前田は「われわれの身体」、由木は「我々の身体」としている。三木が用いている「叡智」は深い道理を知ることができる知恵の意であり、ふつう「英知」ともかく。日本語の「自然の廣袤（土地の広がりの意）」は、難語である。また三木はle meme rangを「同一なる順位」と訳し、前田は「同じ地位」由木は「同じ位置」としている。

つぎの三木訳も、わかりにくい。

***110.** — Le sentiment de la fausseté des plaisirs présents, et l'ignorance de la vanité des plaisirs absents causent l'inconstance.

「在る快樂の徒らなることの感情と、在らぬ快樂の空しきことの無知とは不安定を結果する」(110)。

前田は原文のこの文章に相当する箇所を、「今ある快楽が偽りであるという感じと、今ない快楽のむなしさに対する無知とが、定めなさの原因となる」としている。

この部分の由木訳は、「現に味はっている快楽の虚妄を感じ、未だ味ははない快楽の空虚を知らないところから、移り気が生まれる」となっている。

Des plaisirs présents とは、「いま心に残っている快楽」ということであろう。fausseté は「誤り、いつわり」の意である。et l'ignorance de la vanité des plaisirs absents は、「いま心に残っていない快楽がむなしいものであることを知らぬから」、causent l'inconstance「移り気の原因となる」が原意である。つぎに引くものは、三木が意味をとりちがえた例である。かれは des orgues（オルガンの意）を「楽器」と訳している。ふつう orgues と複数形で用いられるこの語は、厳密にいうと〝パイプ・オルガン〟の意という。à la vérité は「たしかに」という意の副詞句である。

111. — *Inconstance.* — On croit toucher des orgues ordinaires, en touchant l'homme. Ce sont des orgues, à la vérité, mais bizarres, changeantes, variables

「ひとは人間に觸れるとき普通の樂器に觸れると信じてをる。けれど眞實を云へば、それは奇體な、變り易き、定めなき樂器である」(111)。

前田訳は、「定めなさ。人は、普通のオルガンをひくつもりで、人間に接する。それはほんとうにオルガンではあるが、奇妙で、変わりやすく、多様なオルガンである」となっている。toucher は、本来ものや人の体にふれる意か。この文を由木は、「移り気。――人は普通のオルガンを弾くつもりで、人間に接する。確かに人間はオルガンである。だが、奇異な、むら気な、変り易いオルガンであり、…」と訳している。指示代名詞 ce のあとに複数名詞 des orgues が来ており、由木だけが、「人間は……」としている。

つぎの原文にある副詞 naturellement は、「自然に」と「生れつき」の二つの意味がある。が、三木は「自然に」と訳している。しかし、前後の文脈から、ここでは「生れつき」か「生来」と訳すべきものであろう。前田と由木訳では、「生来」となっている。

125. — *Contrariétés*. — L'homme est naturellement crédule, incrédule, timide, téméraire.

「人間は自然に信じ易く、疑ひ深く、臆病で、大膽である」(125)。

つぎに引く三木訳も難点があるようだ。三木はただ字ずらを、そのまゝ日本語に写し変えたような印象をあたえる。冒頭の文に「我々」が四回

も出てくると、くどくなる。かれは notre proper être（われわれ自身の生の意）を「我々の本体の存在」と訳している。La vie que nous avons en nous は、直訳すると、「われわれが持っている生（活）」であるが、これは「われわれの精神生活」とでも訳せそうである。de paraître（外見をかざる、人目をひくの意）は、前田訳では「外見を整える」、由木訳では「世に顕はれようと……」となっている。travailler は前置詞 à をともない、「……することに努める」意が本義である。

***147.** — Nous ne nous contentons pas de la vie que nous avons en nous et en notre propre être : nous voulons vivre dans l'idée des autres d'une vie imaginaire, et nous nous efforçons pour cela de paraître. Nous travaillons incessamment à embellir et conserver notre être imaginaire et négligeons le véritable.

「我々は、我々に於て、我々の本體の存在に於て、我々のもつてをる生に滿足しない。我々はひとつの想像的な生をもつ他の存在の觀念に於て生きることを欲ひ、そしてそれに對して顏を出さうと努める。我々は我々の想像的な存在を美しくし、そしてこれを保つために絶えず働いてまことの存在を忘せにする」(147)。

前田訳は、「われわれは、自分のなか、自分自身の存在のうちでわれわれが持っている生活では満足しない。われわれは、他人の観念のなかで仮想の生活をしようとし、そのために外見を整えることに努力する。われわれは絶えず、われわれのこの仮装の存在を美化し、保存することのために働き、ほんとうの存在のほうをおろそかにする」となっている。

この一節を由木は、「我々は自己のなかで、自己自身の存在のなかで栄(さかえ)む生活に満足しない。他人の観念のなかで、或る架空な生活を送らうと

欲し、それがために世に顕はれようと努める。我々は絶えず自己の架空な存在を修飾し且つ保持しようと力め、真の存在を等閑にする（なおざりにする意――引用者）」と訳している。

三木は la vie を「生」、前田と由木は「生活」と訳している。

つぎの三木訳は、わからぬでもないが、いかにも直訳調であり、あまりすっきりしない。allées et venues は共に名詞であり、「行くことと戻ること」の意である。前田訳では、「人間の本性は、いつでも進むものではない。進むこともあれば、退くこともある」と、かみくだいて訳してある。

354. — La nature de l'homme n'est pas d'aller toujours; elle a ses allées et venues.

「人間の本性は常に往くことではない、それは彼の往と還とをもつてをる」(354)。

つぎの三木訳は、「その」といった所有形容詞をあいまいにしたままの直訳文である。

前田訳では、この一文は「ところで、考えの順序は、自分から、また自分の創造主と自分の目的から始めることである」となっていてわかりやすい。由木訳は、「ところで、思考の順序は、自己から始め、自己の創造主と自己の目的とに向ふにある」となっている。三木、前田、由木らは、おなじように訳し、commencer par……「から初め（始め）……にむかう」としている。

146. — Or l'ordre de la pensée est de commencer par soi, et par son auteur et sa fin.

「思索の順序は自己から初めて、そしてその創造者、そしてその目的に向ふ」（146）。

三木の「パスカルの生と存在論的解釈」に引用されている順序にしたがい、いくつかかれの訳文をひろって検討してみたが、大観すると、三木訳は直訳を特徴としている。訳文は読み手が原文をどのように読み、理解したかを如実に示すものとすれば、もしそれがぎこちないものであったり、意味不明なものであったとしたら、訳者は原典を正しくよんでいることにならない。三木は原意をかならずしも正確に読みとれず、よくわからぬまま、自己流に解釈したものであろう。したがって三木のパスカル解釈は、なまかじりなもので、それが十分に自分のものになっていない。

かれは半解の徒であった。

むすび

ワセダの煙山専太郎（一八七七～一九五四、明治から昭和期の政治学者。早大教授。東大の卒論を本にした『近世無政府主義［一九〇二］で知られる）が、外遊に出かけ、ベルリン入りをしたのは、一九二三年（大正12）十月十五日の夕方のことであった。翌十六日、ベルリンやライプチヒでパン騒動が起ったことを耳にはさんだ。電車やバスの上から市内をみたところでは、とくに変ったところがなかった。

しかし、新聞をのぞいてみると、ドイツ各地で不穏な出来事が起っていることがわかった。この年の一月十一日、フランスとベルギー両軍は、ドイツが賠償金の支払いをひき伸ばしているのを怒り、ルール地方（ヨーロッパ最大の大炭鉱地帯、大重工業地帯）を占領した。ドイツ側はこれにたいして消極的な抵抗をしめしたにとどまった。ルール地方が占領される前から、マルクが大暴落するまでの間の為替相場（レート）は、つぎのようなものであった。

一月初旬……英貨一ポンドに対して　一万マルク
一月末……　〃　七万マルク
五月～八月中旬ごろ……　〃　一四六〇万マルク
十月初旬……　〃　一五億マルク
〃下旬……　〃　六〇〇億マルク

ドイツの大インフレーションは、単にルール地方を占領されたことにその原因があったのではない。ドイツの戦費は、直接課税によらず、もっぱら公債（国家や公共団体が負う債務）の発行によってまかなってきた。これらの公債は、戦勝後、敵国からの戦利品を当てにして出されたものであった。が、ドイツは戦争に負けたばかりか。復員兵や失業者の救済などに多くの支払いをよぎなくされた。

さらに不換紙幣（金、銀の正貨ととりかえられぬ紙幣）が市中にあふれ、マルクはますます低落した。また戦後の社会不安から国内の生産は低

滞したばかりか、多額の賠償を戦勝国に支払わねばならなかった（林健太郎『ワイマル共和国』中央公論社、昭和59・1）。

すなわちドイツは、重層的な悪条件につきうごかされ、インフレ地獄への道をつき進んでいたのである。結果において、ドイツは、同年秋にレンテン・マルク（インフレを克服するためレンテン銀行が発行したマルク紙幣。一兆マルクの紙幣）を発行し、それを一新マルクと交換することによって奇跡的にインフレを慎静化できた。

一九二三年（大正12）秋といえば、三木がハイデルベルクからマールブルクに移動した時期である。かれは外貨のめぐみをまだ受けていたころであろう。かれが大量の洋書を購入できたのも超インフレ下の外貨のおかげであった。

煙山はベルリンに着いた日の夜に、電車にのっているが、そのとき払った電車賃は、二千万マルク。数日後、それは五千万マルクになり、二十日には一億マルクになっていた。ドイツ政府はこの需要に応じるために、さかんに不換貨幣を刷るのだが、とても刷りきれないので、ついには古い紙幣のうえに新しい金額を赤インクで印刷せざるをえなくなった。一九二三年十一月末のドイツ国内の流通紙幣は、四二五クインチリオン（一クインチリオンは、一にゼロを三十くわえたもの）であった。

十月二十三日前後に、煙山はハンブルクに行ったが、泊った高級ホテルの宿賃は、二六〇億マルクであった（邦賃にして四円くらい。この額はけっして安くはなかった）。そのホテルで昼食をたべると、定食が五〇億マルク。パンとコーヒーの代金が、それぞれ十億二千万マルクであった（煙山専太郎『再生の欧米を観る』実業之日本社、昭和3・6）。

文科系の人間（とくにアカデーミカーと呼ばれる教師、研究者、学生）は、斬新な研究テーマがみつかると、まず先行研究の有無について調べ、ついで素材として文献資料をあつめようとする。そして材料がじょじょに集まると、それらに目を通すようになる。やがて研究の構想がだんだん煮つまってくる。書きたい題目や問題点がすがたを見せるようになる。研究論文の作製は、職人がものを作ったり、調理師が料理をつくるのと何ら変わらないのである。

素材のよしあしも大事であるが、粗材であっても扱いしだいで命の通ったものになり、よいものを作れるかも知れぬ。

三木　清が書いたものは独創性に富むものかどうか何ともいえないが、戸坂　潤（一九〇〇～四五、昭和期の哲学者・評論家。元法大教授、獄死）によると、三木は「無から何かを創り出すというような意味での独創家ではない」という。かれが唱えだすものは、すでにそこに現われてい

るもの。その思想の中味もすでに知られているもの。かの文章がときに中味がなく、持って回って難解であっても、通俗性と常識性をそなえているという。三木は発明家というより〝発見家〟〝応用家〟であるという（「19　三木　清氏三木哲学」『戸坂　潤全集　第5巻』所収、勁草書房、昭和42・2）。

戸坂と似たようなことをいっているのは、大内兵衛（一八八八～一九八〇、大正・昭和期の経済学者。森戸事件で東大をやめ、戦後復職し、東大教授のち法大総長）である。一言でいうとかれは三木を哲学者として高くかっていない。大内によると、三木は死して時代の英雄になった。三木が英雄になったのは、その死に方（死にざま）が英雄的であったからだという。またかれは思索家としての三木を評して、「僕は三木君がそんなにオリジナル（独創的）な思想家であるとは思わない。また彼が日本の誇りとなるほどの哲学者だとも考えない」という。

大内の観るところ、三木は西洋の哲学をよくかみくだいて身につける能力をもっていた学者であり、その教養を基礎とし、広義の社会的な問題について、ひととおりの見識をもつ人であった。三木のあれくらいの学問なら、西洋の一流教授ならだれでも持っているものである。またあれくらいの社会的見識なら、三宅雪嶺や長谷川如是閑ももっていたという。

西田哲学がどれほどのものであるにしても、それが今後の日本の哲学にならないという。三木がかりに長生きしたとしても、大したことはできず、死んでもこんにちほどの英雄にならなかったであろうという（大内兵衛「三木君のこと」『哲学評論』第4巻第3号、民友社、昭和24）。

かりに三木の一連のパスカル論が、ひとりよがりの半解にすぎなかったとしても、かれは読者に粗飯を提供したことはたしかである。

三木　清の『パスカルに於ける人間の研究』がこのような作品であったとすると、三木そのひとの人間性（本性）はどのようなものであったのか。かれは自己顕示欲のつよい人間であったようだ。じぶんをより大きくみせるためなら、ドイツ人を目のまえにして、臆（おく）せず研究発表をやり、ときにウソをも平気でつく人間であった。かれに虚言癖があったとすれば、それはあるいみで劣等感のうらがえしではなかったか。

かれは堂々とした容貌をもたなかった。好きになった女性、惚れた女性からことごとく袖にされた。愛する女性にうけ入れてもらえなかったのは、単に顔かたちや容姿だけが理由ではない。人から嫌われる要素、わるい性格があったようだ。かれは慎しみ深さ（デリカシー）に欠け、常識では考えられぬ奇怪さ（ふしぎさ）があったからである。

かれの容貌の特徴は――その広いおでこ、その金壺（かなつぼ）まなこ（くぼんだ丸い目）、つばをためたぶ厚い唇などから成っていた。三木とおなじよう

に報道班員としてマニラにいた今日出海（一九〇三～八四、昭和期の小説家・評論家。のち文化庁長官）は、三木は青年時代にパスカルを研究したという。その著作の中心は、パスカルという人間の妖怪性（あやしさ）だという。三木は人間化けもの論を引用し、この論をふかく広く展開したという。

今は三木が妖怪性を顕著にもっていると思った。今が三木の中にみたものは、パスカルの分身であったのであろう。パスカルも三木も、怪しいことばを使って、人を惑わしたのである。

三木　清のドイツ、フランス留学の意義と成果とはなんであったのか。

官費留学生には、いろいろなタイプがあるが、中には遊蕩三昧にひたり、〝遊学〟を地でいった例もすくなしとしない。しかし、三木のばあいは岩波という一書店の篤志出費による私費留学にちかいものであった。かれは岩波から出資をえたときの気持を何も語りのこしていないが、おそらくその好意的な申し出に歓喜雀躍したことであろう。

折からドイツは第一次大戦後の超インフレ時代であったから、外国人はその外貨を最大限活用でき、何百何千倍にも使えるよき時代であった。逆にドイツ人にとっては、地獄の時代であった。三木は為替相場のおかげで、学習のあいまに書物の蒐集につとめ、船便でどんどん日本へ送った。その数は数千冊。

三木にとっての海外留学は、京都の学生生活の延長であり、じっさいかれはよく勉強したようだ。留学先のハイデルベルクでは、著作によりその名を知っていた著名な学者の講義をひやかし程度に出ただけでやめた。が、替わってゼミや読書会に精力をそそぎ、また余暇のすべてを読書につかった。

むずかしい内容の専門書をどこまで理解し、よみ進んだものか不明だが、興味をひく内容だけをひろい読みし、他はすてたものであろう。人が書いたものを読む行為を〝勉強〟というとすれば、かれはじつに勉強家であった。かれは人の述作をただ読むことだけに満足せず、まずいドイツ語を駆使し、西洋の学徒に伍してゼミナールで、みずから設定したテーマについて、何度もレポートを発表した。また師匠（リッカート）のあっせんにより、有力紙に小論をのせてもらった（岩波茂雄への報告では、新聞社からの依頼原稿であるとし、ウソをいっている――一九二三・五・一六日付書簡）。それは留学の費用をだしている岩波茂雄への恩にむくいるよき成果報告であった。

三木はドイツの大学生が修学地を転々とするように、ハイデルベルクよりマールブルクに転学した。大学で学んだのはこの二年半だけである。

のちフランス（パリ）に移動するのだが、当地の大学に籍をおかず、その公開講座に何度か顔をだしただけでやめた。あとは興味をひくフランス書をもとめ、それらを下宿で耽読した。かれはすでにマールブルクにいたころ、パスカルの『パンセ』にふたたび着目し、哲学的人間学（人間の存在を問う）の見地から、それを味読しはじめていたようだ。

パリで本格的にパスカル文献をあつめるにつれて、ハイデガーの手法を手本とし、新たにパスカルについて稿をおこした。

その結果生まれた論文が、三木にとっての最初のパスカル論「パスカルの生と実存主義的解釈学」である。このタイトルだけでは、じっさいそれが何の研究なのか、イメージできないが、これをつぎのように読み換えることができる。

――パスカルにおける人間の生の表出（すなわち『パンセ』に現われた人間）を、その表現された文字から解釈しようとしたもの――

と。

三木のフランス語は、一高生のとき暁星学園の早朝クラスですこし習っただけのもので、ほどなく中断した。渡欧後、ドイツやフランスで、仏人教師につき会話を中心に学習を再開した。

日本人にとっての語学（英独仏）はむかしから、イロハを習ったのち、教わるというより、勉強させられた歴史でもある。三木のようにすぐれた頭脳の持主なら、語学の手ほどきを受けたのち、独学でじゅうぶんやってゆけるはずである。かれの古典語（ギリシャ、ラテン語）も、はじめ独学であり、ドイツ留学中に再開し、ドイツ人から原典をよんでもらった。

まんぞくな仏和辞典がない時代における、三木のフランス語学習歴をたどると、かれは日本人教師から仏文の訳読（和訳）をならわず、フランス人から実用会話ていどのものしか教わっていない。かれは高級なフランス文を読解する訓練をほとんど受けていないのである。そういった中途半端な修業で、はたしてパスカルの『パンセ』のような難解なフランス語を正確によむことができたかといった素朴な疑問が生じる。

三木のパスカル論第一号（「パスカルの生と実存主義的解釈学」）にみられる訳文を検証した結果、つぎのような点が明らかになった。

一　三木は『パンセ』のところどころを読みちがえている。

一　三木はじぶんで読みとけない、難解な箇所を原意から逸脱し、自己流に解釈している。

一　三木訳は直訳にちかく、読みづらいばかりか、悪文である。

一　三木は『パンセ』をよく理解していたとはいえない。

三木の『パンセ』の読解が、かならずしも正確なものでないとすると、後年それを訳述したパスカル学の権威（前田陽一、由木　康）の訳業は、どうであったのかといった疑問が生じる。両者の訳文を仔細に検討すれば、誤りもあるはずである。が、いまそれにふれることを控えよう。

筆者にとって前田訳より、由木訳のほうが、いちばんわかりよく、親しめるものであった。由木はきっと、原意がよくわかっていたのであろう。それがそのまゝ訳文に反映している。……

参考文献

由木　康訳『仏蘭西古典文庫　1　パスカル瞑想録　上』白水社、昭和22・7。

前田陽一編『世界の名著　24　パスカル』中央公論社、昭和41・11。

前田陽一・由木　康　訳『パンセ』中央公論新社、昭和48・12。

三木　清「パスカルと生の存在論的解釈」『思想』第42巻第47号所収、大正14・5。

谷川徹三・東畑精一　編『回想の三木　清』文化書院、昭和23・1。

今　日出男著『小説集　人間研究』新潮社、昭和26・5。

浜田義文・藤田正勝　監修『三木　清の生涯と思想』財団法人霞城館、平成10・3。

岩波書店編集部編・飯田泰三監修『岩波茂雄への手紙』岩波書店、平成15・11。

注・同書の二四六頁～二八〇頁まで、三木がヨーロッパから出した岩波宛の書簡二十一通を収録している。『三木　清全集』に入っていないもの。三木の留学生活を知る貴重なもの。

柴田隆行「三木　清のドイツ留学生活」『井上円了センター年報』第6号、平成9・7。

大久保孝治「清水幾太郎における文体の変遷」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第65巻、平成32・3。

宮永　孝「法政と社会学」『社会志林』第65巻第4号、平成31・3。

『太陽』博文館、大正13・1・1。

注・マルクの下落と食物の欠乏にくるしむ貧民の写真を収録。

石山脩平「教育的解釈学」『教育・国語教育特別号　解釈学と国語教育の問題』所収、厚生閣書店、昭和9・9。

岩淵悦太郎編著『第三版　悪文』日本評論社、昭和55・1。

三木　清編『新版　現代哲学辞典』日本評論社、昭和16・3。
Victor Giraud 編 *Pascal Pensées*, Les éditions G. Crés et Cie, 1924
Heidelberger Bilderbuch, Erinnerungen von Hermann Glockner, H. Bouvier u Co. Verlag, Bonn, 1969
Werner Moritz 編 *Japanische Studenten in Heiderberg*, —Ein Aspekt der Deutsch-japanischen Wissenschafts beziehugen in den 1920er Jahren, Archiv und Museum der Universität Heidelberg, Schriften 19, Verlag regionalkultur, 2013

注・ドイツ帝国のころから第一次世界大戦後の時代（わが国の幕末から大正十年代にあたる）に、ドイツの大学に学んだ正規、非正規の日本人留学生の数は、ゆうに二千名をこえるようだ。同書には阿部次郎、天野貞祐、三木　清、九鬼周造、北　玲吉、石原　謙、羽仁五郎、成瀬無極、大内兵衛、赤松　要（かなめ）ら十名の日本人留学生の記事が、収録されている。かれはいずれも非正規学生（聴講生）として、講義やゼミナールに出席した。その学籍簿上の記録は貴重なものであり、かつ興味をひく。本書は参考とする点が多かった。好書である。

H. Sutherland Edwards 著 *Old and New Paris*, vol. I, Casseell and Co., Limited, London Paris & Melbourne, 1893
Walter Kürschner 著 *Geschichte der Stadt Marburg*, N. C. Elmertische Verlagsbuchhandlung, C. Braun, 1934
Elmar Mittler 編 *Heidelberg, Geschichte und Gestalt*, Universitätsverlag, 1996
Karl Baedeker : *Northern Germany*, Karl Baedeker, Publisher, Leipsic, 1904
Karl Baedeker : *The Rhine*, Karl Baedeker, Publisher, Leipsic, 1911
Karl Baedeker : *Southern France*, Karl Baedeker, Publisher, Leipsic, 1907
Karl Baedeker : *Paris and environs*, Karl Baedeker, Publisher, Leipsic, 1913